

翻 訳

「二人」の物語
—— Joe Meno, *Demons in the Spring* より ——

横 山 千 晶

リンゴは君を笑わせることができる (An Apple Could Make You Laugh)

リンゴはほかのリンゴにキスをする。灰色の猫はほかの灰色の猫にキスをする。木もキスをする。君と僕はキスしない。僕らは職場の同僚だ。お互いに別の人と結婚している。それで構わない。だって僕ら、君と僕はただ、考えているだけだから。キスをすべきかどうか。どちらもよくもあるし、悪くもある。たぶん。職場では、こんなこと口に出しては言わないけれど、互いにピンクの電話伝言メモを使って、精巧な図を描く。君はこんな言葉を書く。「あなたにキスするのはこんな感じ。」そして2匹の蝶々が稲妻に打たれている絵を描く。君は灰色のパティションの上から僕にメモを差し出してくる。僕はそれをじっと見て、本当にこんな感じなのかなあ、と思う。僕も自分の絵を描いて、言葉を書き加える。「君にキスするのはこんな感じ。」僕の絵は氷でできた男が女にキスをしている絵なのだけれど、女はストーブなのだ。僕らは今までにこんな絵を何百と描いてきた。実際僕らは、互いにキスするのはどんな感じだろうと想像をたくましくする以外に、職場では何の仕事もしていない。あまりに長いこと考えすぎて、自分たちが何をすべきなのかも忘れてしまっている。

君の旦那さんには僕は1、2度会ったことがある。彼はいつも悲し気に見える。顎の線が弱くて、その目は暗くいつも黒い雨傘を抱えている。君が彼の黒い車

に乗り込むのを見たことがある。僕は君の、魂を奪うような白い足首がちらりと見えて、僕が想像したくもない世界へと消えていくのを見ていた。君が泣いているのも見たことがある。そして君のことを泣かせるのがあの男であることも知っている。君が電話で彼と話しているときに、笑っているのを見たことがある。君の声は柔らかく幼い少女のようで、それは誰かほかの人。僕がその前でひざまずき、それからその灰色のフランネルのスカートを、膝のぎりぎり、というところまで持ち上げたくなるような誰かだ。君が彼のこと、君の旦那のことをまだ愛しているのかどうかなんてわからない。君が知っているかどうか知らないけれど、僕には妻はいるが、もはや話をすることもない。彼女は誰かほかの人と、ドイツのどこかで暮らしている。彼女の写真は一枚も持っていないけれど、怒りで上気したその顔を覚えている。短い金髪の前髪が、すっかり諦めきってじっと前を見つめる両目を際立たせていた。ほかの時に思い出すのは、背が高くしてしなやかで、細い白い犬歯を持った彼女だ。僕らは結婚した時は若かった。でも今でも僕ら、つまり君と僕だって、そんなに老けてはいない。

仕事中、君は紙飛行機を作る。作った飛行機に君はいくつもの名前を付ける。2回完璧に旋回して、結局墜落してしまう飛行機は「2旋回機」。水の中に落ちこちてしまうのには「潜水艦機」。うまく工夫して、気流に乗ってずっと浮遊状態を保つように作った飛行機は「永久漂流機」。僕らは2機ずつ作ってオフィスの窓から飛ばす。そして飛行機が風に乗って、翼と翼を携え、町の上空に消えていくのを見ていた。紙飛行機が重力の誘惑に負けて墜落する時に、僕は君にキスすることを考える。それはまさにこんな感じなんだろう、と思う。

ある日、僕らは一緒にランチに出かける。途中、君は僕のほっぺたにまつげが一本ついているのを見つける。君はそれをその白い指先でとらえて、僕は目をつぶって、フッと息を吐いて、どこかの誰かに、僕ら二人を100年前の100万マイル離れたところを巡礼する旅人に変えてくれないかと頼む。僕らはどこかのジャングルに二人っきりでいて、裸だ。昼食で、君が頼むのは野菜だけだ。

君が食べ終わって、手を伸ばして僕の皿の上のものを食べ始めると、僕は急にとても幸せになる。自分でもこんなことで、こんなに幸せになることが気に食わない。僕は君が唇の角に白いナプキンをそっとあてがうのを見て、今ならどんなにたやすくキスができるだろう、とか、どんなにたやすくトイレとか、モーターの空き部屋とか、タクシーの後部座席とかに二人して消えてしまうことができるだろうか、と想像する。そして僕らが、こんな状況でなかったら造作なく外せるはずのボタンとか、簡単におろせるはずのチャックとか、厄介なウェストバンドとかと、もぞもぞ格闘する間に、僕の唇に君の唇が重なるのを感じることができる。僕は君に手を伸ばし、両手をその腕の下に回して、大理石の洗面台のへりに君を抱き上げて座らせる。君のブラウスはクリーム色のカーテンのように左右に開いて、君の両肩は、雪でできたレイヨウのように白くて目を見張るほど美しく、君の乳房は僕の手、指、そして舌になだれ込む二つのダイヤモンドの丘のようだ。僕は君のフランネルのスカートを手繰り上げて、君のほっそりとした太もものにぴったり寄り添う柔らかな伸縮性のあるストッキングを膝までずりおろして、君の素脚の先まで来たところでそのままにしておく。それから考えることはしない。僕らのどちらも考えることはしない。絶対に考えることはしない。僕は君の前に膝をつく、優しく君の太もものかすかにへこんだところに口づけする。君の淡いピンクのパンティーの柔らかな縫い目の下に僕の指を入れる。それ以外ないだろう？ 君はどうするだろうか。僕が君の前にひざまずいたら君はなんと言うだろう。君は笑うだろう。君は笑って僕らがこんなことをするのは構わないんだ、と言うだろう。なんてことはないのよ、本当になんてことはないの。

君の髪はブロンドだ。君の首はキリンのようだ。君の手は小さくて、でも皺だらけだ。君は灰色のフランネルのスカートと黒いストッキングをはいている。僕は君のスカートに時々触って言う。「今日は素敵だね。」二人とも、そんなことなんかどちらも考えていないことを知っている。僕は君の腰の形を考える。それは僕にハープを思い起こさせる。それからこの腰が僕の腰にぴったりはまるかどうかを考える。素肌と素肌。僕らの周りのものが地面にガラガラと崩れ

る間、この体の重みが君の体の上に重なっていることを考えている。君の鎖骨は君が息をするときどんな音を立てるんだらう。君の足首の肌触りはどんな感じだらう。君の手首、きみの耳たぶ、君の首の付け根。君の肘、そして、ほかの人はおそらくキスをするなんてこと考えないような素晴らしくやわらかな体の部分はどんなだらう。オフィスで、僕はキスできるありとあらゆる体の部位を描いたとても複雑なフローチャートを作っている。君の唇にどうにか到達する前に何百も何千もの部位がある。(もしも君の指先からキスを始めるんだったら、それから掌に移って肘の内側、それから君の肩、それから君の胸、と移っていく。君のつま先から始めたら、まず一本一本の指にキスして、脛に沿っていくと、やがて腿の内側に達する。) このチャートを君にファックスで送ろうと決める。君はファックスで文書を返す。僕はしばらく考えて、ようやくそれが価格表であることが分かる。足の指一本、耳たぶ片方は数千ドル。君もわかっているだろうけど、どの部位一つとっても僕にそんなお金はない。

仕事中、僕らは二人がすれ違うきっかけをでっちあげ始める。僕らも含めて誰も信じられないようなきっかけだ。君は僕に電話を借りてもいいかと尋ねる。君の電話の鳴る音があまりに元気すぎるからだ。君が返してくると、電話は急に魅力たっぷりにになっている。一度君のことを夢で見たのだが、その夢に出てきた電話なのだ。その夢の中で僕らは石鹸でできている。しばらくたって、君はペンを借りる。君のペンは呪われているからだ。手渡して返してくれると、ペンのお尻にはっきりと君の歯型が付いている。そこに触っていると、君がこの歯形を手紙、警告、僕への誘いとして残したことが分かる。

仕事中、僕は会議のとき君のはす向かいに座っている。すると君がくしゃみをする。僕が「グズンタイト(お大事に)」と言うと君は「ありがとう」と言うので僕は「どういたしまして」と言うが、まるで僕らはほかのことを話しているかのようだ。君は「私もそうしたいけれど、そんなことしたら、あなたのことも私自身のことも絶対に許せないわ」と言っている。僕は「一度でもいいから僕を君の前にひざまずかせてくれたら、許してくれなくてもとても長いこと僕

は生きていけると思う」と言っている。

僕らはお昼休みに公園に散歩に行く。僕らは自分たちの胸中がわからないので、何もしないでただ手をつないでいる。並んで座って外の世界を見ていると、二人が何を感じているのかが急に見えてくる。ガラガラとうるさい音を立てる空き缶を付けた自転車が手に手を取り合って道を走り抜けていく。長い白いヴェールをまとった犬たちをほかの犬たちが追いかけている。岩がこっそりと欲望の言葉をささやきあっている。

君は、一緒にいないときに僕が何をしているのかを尋ねはしない。僕が知りたくないことを僕に話したりしない。たとえばベッドで君たち二人がどんな風に体を寄せ合っているのかとか、彼が君に顔を向けて寝ているのかとか、君は背中を彼に向けているのか、とか、彼は何か秘密めいたことを小声で君に言ったりするのか、とか。君はイキそうなときにどんな声をあげるのかとか。どんなふうに君は動くのか、君は目をつぶっているのか。君は冗談を言ったりするのか、それともほかのことには目をつぶって、とても真剣になるのか。僕は君にこんな質問をしてきたけれど、君は答えはしない。だから聞くべきじゃない。僕は今知っている以上のことを知りたくはない。

リングは君を笑わせることができる。そしてそんな君はとても素敵だ。ランチの時、僕らは混み合った大通りを縫って歩いていく。君は突然立ち止まって露店の店先で二つの青リングを手取る。君はそれを見て、二つのリングは愛し合っているのだと言う。君は二つのリングにささやきあわせる。踊らせる。二つのリングの踊りは即興で、優美だ。踊りが終わると、リングは結婚して小さな祝宴が催される。二つのリングがキスすると、君も僕も笑う。とっても素敵じゃないか。二つはうまくやっけていける。誰の目にも明らかだ。一緒に僕らはオフィスまで戻って、互いのことをとても憎く思う。こんなことであんなにたやすく笑えるなんて。

ある日、僕はこれ以上持ちこたえられなくなる。僕は靴を橋の上から投げる。ほころび始めた花のつぼみを引きちぎる。自転車で木に突っ込んで電話ごしに君のことを怒鳴りつける。君の旦那はどこかに旅行中だ。君はもう彼が行ったきり戻ってこないと考えているのかもしれない。僕はあとで後悔するようなことを君に言う。僕は君に僕の頭の中のことを言う。フランネルのスカート、ストッキング、ひざまずくこと、君の膝に手を置くこと。僕は君と一緒にロンドンに移住しようと頼む。沈黙があってそれから君は思い切りガチャンと受話器を置く。

君はとても若くてかわいくてこれからもずっとそれは変わらないだろう。君はオフィスにいる。君は電話中だけれど、上の空だ。君は僕のことを見て、今僕にキスをしていいかと聞く。もちろんだよ、と僕は言う。君は言う。それがあなたが真剣に考えてきたことなんでしょう。これからどうなるんだろう、と僕らは思う。僕らがキスをしたら、二人がいつも考えてきたように、この世は終わるのかもしれない。建物は崩れ去り、街灯は銀色のガラスに変わるのかもしれない。聖堂は輝く赤いキャンディになって自身の重さでばらばらに折れてしまうかもしれない。子供たちやハトがやってきて、そのかけらを全部食べてしまうかもしれない。そして皆あつという間に消えてしまうのかもしれない。でもどうなるかなんて、結局僕らにはわからない。

僕らがキスをすることはない、そうだよ、と僕は聞く。

君は僕のことを見て、恐ろしい知らせを告げる。君は旦那のもとを去ることを決めた。君は彼のもと、この町、そして何もかもから去ることを決めた。

本当に？ と僕は聞く。

本当に、と君は言う。今日。私は何もかも後にするの。

そう。

君はどこか君が来た場所に戻る。そして今やもう、君は僕の方を見る気もない。

僕は一緒に行ってもいい？ と聞く。君は言う。ごめんなさい。僕は君の肩に触ろうとするけれど、君の背中はこちらを向いている。僕は机の縁に座って

君が荷造りするのを見ている。君は小さな茶色の箱を用意している。僕はどうかして消えてしまえる方法がないかと考える。僕は君に、ハガキでもくれないかと尋ねる。君は、できたらね、と言う。僕はなんとかして君のことをつなぎとめなきゃ、と自分に言い聞かせる。でもその勇氣は出ない。君は机のものをすべてを片付けて、箱の中に収める。ほんの少しでも時間を無駄にしたくなさそうだ。君は何か忘れ物はないかとオフィスを見回す。ああ、そうだ。緑のミトン忘れていた。君はそれも箱に入れる。僕は君がため息をつくのを聞く。でも僕は何も言わない。僕は君がコートのコートを一つひとつはめていくのを見る。君の名前を口にするけれど、君が顔を上げることはない。

ストックホルム 1973 (Stockholm 1973)

仮釈放中のヤン・オルソンが、スウェーデン、ストックホルムの中央銀行区域にあるノルマルム広場に建つクレジット銀行の建物に入っていく。上着のポケットには小さなピストルを忍ばせている。オルソンは、誰かさんの車のダッシュボードから盗んできたこのピストルが、使える代物だとは思っていない。その車といえはすっかりさび付いたアメ車で、フロントガラスにいたっては割れていた。ヤンはピストルを手にして、直感でこんなハジキじゃろくなことになんねえぞと思った。ヤンはちょっと前に大量のアンフェタミンを吸っていた。そのせいで、自分はほかの人には見えない何かが見えるんだと錯覚していたのだ。

クレジット銀行のガラスの回転扉の中に入ると、オルソンはこの時とばかりピストルをポケットから取りだし、頭上高く振り上げるとその黒い目を見開いてにらみを利かせた。彼は回転扉のガラスに映った自分の、髭の生えた顔と洗っていない髪を見て、ぎょっとする。子供の本の中から出てきたようないでたちだ。悪魔に自分の魂を売ってオオカミになったという誰かさんのような。ヤンはまだ回転扉の中にいるうちから叫び始める。これが一連の素人じみた過ちの始まりだった。銀行の顧客たちは黒っぽいレザージャケットを着た若者が小さなピストルを頭上に振りかざしているのを見て、すぐさま大騒ぎを始める。黒いドレスに白い毛皮のコートを着た女性はその凶器を見るやいなや卒倒し

て、大理石の床にバタンと倒れる。主人の腕の中でいい子いい子されていた黒いトイブードルが吠え始める。母親の手を握っていた子供が大きな声で泣き始める。その小さな肺が恐ろしい勢いでつぶれては膨らむので、彼女の叫び声はヤンの叫び声よりもさらにぞっとするような音で鳴り響く。

今まさに俺はとんでもないへまをしでかしているとヤンは考えるが、もう時すでに遅しである。彼はみんなに向かって言う。「銀行強盗だ。」でもその言葉は回転ドアの厚いガラスに阻まれてもごもごしか聞こえない。ヤンがどうか大理石の床の待合室に入ったときには、茶色の髭と濃いもみあげを蓄えた警備員が警察に電話をかけている。ちょうど警備員は右手に受話器を持っている。それは明るい黄色で、けたたましい音を立てる警報器のようにはっきりと目に飛び込んでくる。ヤンは黄色い電話機を見て、その小さな爬虫類のような足をもぎ取られ、かごの中に金切り声をあげながら横たわっている鳥のことを考える。彼は銀色の釣針に引き裂かれた大きな魚のことを考える。その黄色がかった乳白色の内臓をさらけ出し、もう役に立たない赤い鰓で必死になって息をしようとしている。また彼は中にハチがたくさんいる黄色いハチの巣を思う。ぶつかり合って、怒り狂って互いを刺し合っている。死の不協和音のブーンという音は、今彼がびくつきながら歯ぎしりする音そっくりだ。ほら、二人の警官がもう銀行のガラス扉を通してこちらに突進してくる。一人は背が低く勇敢そうだ。もう一人はもっと背が高く、とつてもビビっているように見える。ヤン・オルソンはピストルを構えると一発撃つ。最初の警官の腰の右側に命中し、彼は磨き込んだ床に倒れ込む。でもその一発は致命傷にはならない。

ヤンには、もう一方の警官をどうしたものかよくわからない。この瞬間、銀行の内部は耐えられないほど静まり返っている。子供は泣くし、犬は吠えるし、撃たれた警官はうめき声をあげてはいるのだけれど。銀行の客はみんな揃って膝をつき、静かに祈っている。そのひそひそ声は不気味だ。それは哀し気な、肉体を持たない亡霊たちのようだ。ヤンは2番目の警官に武器を捨てろと命じる。ありがたいことに、警官はその通りにしてくれる。汗でべとべとのその大きな手が震えている。この怯えた祈りの声におののいて、ヤンは丸腰の警官に何か歌ってくれと頼む。

——何か歌えて？ と警官は聞き返す。その目は大きく見開かれて、睨がびくついている。

——何か歌って。なんでもいいよ、とヤンは泣きそうになりながら言う。

——でも、俺の歌う声ったら、本当にひどいんですよ。

——いいから、頼むから何か俺たちのために歌ってくれよ。

緊張の面持ちの警官は、黒と灰色の大理石の床に手足を広げてうつぶせになって横たわっている傷ついた同僚をじっと見て、目をつぶると歌い始める。警官がかなり声をあげ始めても、ヤンにはなんとといって歌っているのか分からない。ヤンには、それはただの音、不安げに吸ったり止めたりする、切羽詰まった呼吸音にしか過ぎない。警官の口から出て響き渡るその音は、彼の脈拍とまったく同じで、その脈拍は弱まっていく仲間の心拍と同調している。刻一刻とみんなの望みが失せ始める。みんなの心臓は、かなとこになり、大きな丸石になり、みんな沈んでおぼれていくような気持ちになる。

ヤンは歌う警官の前に立ちはだかる。その顔は若くほっそりとしている。ハンサムでハシバミ色の目をして、あざ笑うかのような口元をしている。こんな警官の顔を眺めていると、ヤンには見えてくる。こいつには愛する妻がいて、その上子供も二人いる。男の子はスキーが好きで女の子は可哀そうな馬たちについての詩を書いているんだ。ヤンにはそのことが分かる。警官が歌おうと選んだ歌がなんであるのかわかっているのと同じぐらいはっきりと。それはエルヴィス・プレスリーの「ロンサム・カウボーイ」だ。

ヤン・オルソンはあたりを見回す。銀行の客たちは今やみんなゆかにひれ伏してすすり泣いている。その震える手でべたつく頭を抱えている。警官が歌っているにもかかわらず、ヤンの耳にはその祈りがまだ聞こえてくる。まだ子供が泣いているのも小さな犬が吠えているのも聞こえてくる。ちょうどその時、電話が——警備員の机のわきに置かれたあの黄色い電話が——鳴り始める。

——出ましようか？ 警備員が尋ねる。

——どうぞ、とヤンが言う。

警備員は黄色い受話器に向かってほんの数秒何か話して、それから言う。警察です。そちらの要求を知りたいということだけれど。

ヤンは混乱した銀行内部を見回す。今やすべてが森閑としている。ちっぽけな犬でさえ、耳を澄ませているようだ。

——俺の望みは……と言ってヤンは口ごもる。俺のマブダチ、クラーク・オロフソンを連れてきてほしい。

——なんだって？ と警備員が尋ねる。

——マブダチのクラーク・オロフソンをここに連れてきてほしいんだ。

——それが一番の要求なんですか？ と警備員が尋ねる。

——そうだ、とヤンは言う。やつは俺の友達なんだ。どうしたらいいのかやつはわかっているよ。

警備員はこの要求を黄色い電話の受話器に向かって繰り返す。受話器はその大きな白い手の中で震えている。

——ほかには？ と警備員が尋ねる。

——そうだな。それに 300 万クローナ（訳注：日本円で 1 クローナはおおよそ 12 円）ほしい。

警備員はこれも伝える。話すときに彼の歯ががちがちと鳴る。

——あと銃二丁。手に入る中で一番の奴を。

——どんな銃？ 警備員が尋ねる。

——どんなのでもいい。弾が込められているんだったら。

警備員はこれもそのまま伝えるが、彼の語気は弱く、囁き声だ。

——それに防弾チョッキも二着。そしてヘルメット二つ。一つは俺用、もう一つはマブダチのクラークのためだ。そして超スピードを出せる車。

警備員はももごとこれらの要求を一つひとつ伝える。

——どんな車がいいですか？ と警備員は尋ねる。

ヤン・オルソンは振り返って、大きなガラス窓から外を眺める。ちょうど午後の 1 時を回ったところだ。外ではここで何が起きているのかなんてお構いなし。自動車が通り過ぎて、買い物客はバッグをこっちの手からあっちの手に持ち替えて、自転車に乗った女の子がペダルをこいでいく。彼女のスカートは、黄色で薄手で、そよ風とじゃれ合うように翻っている。

——早ければどんな車でも構わん。あと、黄色じゃなければな。ヤンはこ

う言って、警備員がこの情報を伝えるのを待っている。

警備員はこの最後の要求をもごもごと伝えると、おもむろに顔を上げる。

——できるだけ要求に沿うよう努力するそうです。すべてが準備できたらまた電話してくるそうだ。

——よし。

ヤンはあたりを見回し、突然我ながらうれしくなる。

——それまでどうしたらいいんでしょう。警備員が尋ねる。

ヤンはその質問にどう答えたらよいものかまったくわからない。ほんの少し考えてみたら、ふとあるアイデアが浮かんでくる。

——みんなここにいるんだ。これから人質を一人選ぶから。

——人質だって？ 馬鹿言うなよ！ 傷ついた警官が叫ぶ。こんなことにこれ以上他人を巻き込む必要はないだろう。

ヤンは大理石の床のここそこにひれ伏している客たちをじっと見る。みんな哀しそうで、血の気の失せた青白い顔をしている。皮をはがれて絨毯にされた動物のようだ。大きなガラス窓と大理石のカウンターの後ろには、4人の窓口係がいる。みんな女性でみんな若くてきらきらしてかわいらしい。色とりどりのタートルネックのセーターとブラウスとスカートを身に着けて、4人ともどこか遠くの惑星みたいなで立ちで、ヤンはその星を訪ねてみたいと思う。

——4人とも俺と一緒に来てもらう、とヤンは言ってピストルを彼女たちに向ける。俺の連れが来るまで一緒にいるんだ。

——俺たちはどうしたらいい？ と警備員が尋ねる。

——ほかの奴らは行ってもいい、とヤンは言う。

彼はピストルを最初の窓口嬢に向ける。彼女はクリスティン・エーネマルク。ほっそりとしたブロンドの娘で、はっとするような青い目をしている。

——どこに隠れるのが一番なんだい？ ヤンは銃口をクリスティンの柔らかいオレンジ色のセーターに押し付けて尋ねる。

——大金庫室よ。

——じゃあそこに行って、クラークが来るのを待とう。誰かトランジスタラジオを持っているか？

——はい。窓口嬢の一人、エリザベス・グルバリがおずおずとその小さな右手を挙げて囁く。

——いいぞ。持ってきてくれ、誰かに踊ってもらおう。

ヤンは4人の後ろについてピストルをクリスティンの背中に向けたまま、どしどしと歩いていく。まずこのクリスティンは金髪で、目を見張るほどきれいだ。その前に髪の毛の色はさえない鼠色だがチャーミングなエリザベス。そして瓜二つの双子の姉妹、サンドラとダイアン・エークルンドは黒い目とまっすぐな茶色の髪の毛をしている。4人の娘たちは一列になって歩き、何も言わずに白い長い廊下の奥へと消えていく。その間に、ほかの客たちは立ち上がると叫びながら、我さきにと正面のガラス扉から外に出ていく。

背の高い警官は歌うのをやめて、相棒をどうにか立たせると、力づくで引きずってガラスの回転扉から外に出る。傷ついた警官が外へと引きずられていくと赤黒い血の跡がそれに続き、彼の靴のゴム底が床に擦れて音を立てる。ほんの少しの間に銀行の待合室はがらんどうになり、失望と静寂の静物画となる。

大金庫室は暗く細長くて、小さな棚と銀色の貸金庫がぎっしりと並んでいる。ヤンはエリザベスにラジオをつけるように言う。ディスコ以外にたいした曲はかからず、金庫室の中なので、受信状態はとても悪い。

——お前たちの中で誰が踊れる？ とヤンが尋ねる。

——私、結構ダンスは得意よ、とクリスティンが言う。

——ほかには？

他の3人の娘たちはみな首を横に振る。

——オッケー。じゃあ君が踊るんだ。

クリスティンはうなずくと踊り始める。最初はゆっくりと両脚、そして腰を右へ、左へと動かす。ヤンはピストルでラジオを指すと、エリザベスにもっと音楽の音を大きくしてくれないかと頼む。クリスティンは目を閉じて、たった一人で、自分の小さなアパートにいるんだと想像する。今は土曜日の夜でデートの相手が電話をかけてくるのを待っているんだ。

ヤンは明かりのスイッチを見つけて、ぱちぱちとつけたり消したりする。照明効果だ。ダイアンとサンドラの姉妹は、銀行強盗の妙な遊び心に不意を突か

れて、まさしく同時に微笑む。

——君たちはどうなんだ？ ヤンは双子に尋ねる。

二人は同時に肩をすくめると踊り始める。ぎこちないそれぞれの動きは、鏡に映ったように対称だ。二人の長い髪の毛すら、同時にさらさら揺れたり、しゅっと跳ねたりするようだ。

——いいぞ、とヤンと言う。オッケー。調子が出てきたね。

その長いディスコの曲が終わる前に、外で警察がメガフォンでヤンに大声で呼びかけているのが聞こえてくる。彼がエリザベスにピストルで指示すると、エリザベスはすぐさまラジオを消し、また不安そうな顔になる。

——ヤン・オルソン！ メガフォンを通した声が聞こえてくる。君の友人、クラーク・オロフソンを見つけ出した！ 今銀行に入る！

ヤンはクリスティンに銃口を向けると、言う。へんなまねをするなよ。そしてそのまま銀行の待合室に彼女を連れていく。午後の真っ白な日差しの中に入っていく前に、彼は立ち止まる。突然警察の狙撃隊の一人に銃弾を一発、この額にお見舞いされるさまが脳裏に浮かぶ。彼は少しばかり震えだし、倒れないようにクリスティンにしがみつく。それからまたもや2個アンフェタミンのカプセルを取り出して、まず一個、クリスティンに勧める。クリスティンはやんわりと断る。二人で日に照らされたロビーの中にゆっくりと踏み出す。ガラスの回転扉や窓の向こうから、ヤンの目に飛び込んでくるのは、おびただしい数の警官の青い制服と、こちらに向けられた銃と、青いヘルメットと黒い防弾チョッキと、パトカーと、有蓋トラックと、青いフラッシュライト。

——こんな騒ぎを起こすつもりはなかったんだ、とヤンは哀しそうに言う。本当だぜ。

警察官のバリケードの後ろから、やって来るのはヤンの親友、クラーク・オロフソンだ。クラークはなめし皮のジャケットを着てその下にはど派手な花柄のシャツを着込み、ベルボトム・ジーンズといういで立ちだ。まるでディスコから無理やり連れてこられたかのように見える。ヤンがゆっくりとクラークに手を挙げて見せると、クラークはこげ茶の髭の合間から微笑んで、目をくるりと回して見せる。まるで「いったい何をしでかしちまったんだ、この野郎」と

言っているかのよう。

——こいつは世界中でいち番のマブダチなんだ。一言一言をクリスティンのうなじに囁きかけるようにヤンは打ち明ける。やつだったらこれからどうしたらいいのか教えてくれるよ。

クラークは小さな通りをわたってこちらに来ると、銀行の重たいガラス扉の一枚を押して入る。ヤンは友人の幅広い顔を見つめる。その暗い目の形と、ほさほさに伸ばしっぱなしの顎髭をみて、すぐさまクラークの厄介事だらけの人生の一部始終を理解することができる。大親友のクラークも自分と同じようにタガが外れたやつであることも、これから先も何度でもお縄になることも、二人の友情からはまともなものは何ひとつとして生まれぬことも一目でわかるが、それでもヤンは、感謝のあまりしくしくと泣き出す。クラークは2丁のいかつい自動小銃と2着の防弾チョッキを携えている。

——来てくれたんだ、とヤンは小さな声で言う。

——もちよ。クラークはにかっと笑って言う。

ヤンは、優しくピストルをクリスティンのあばら骨に押し付けると、3人揃ってそそくさと長い廊下の先にある金庫に戻り、友人を大金庫室へと連れていく。ヤンは突然立ち止まり、不安げに目を吊り上げる。

——ヘルメットはどうしたんだ、とヤンは尋ねる。ヘルメットはどこにある？

——そんなもん要らねえよ。人質をとってんだ、とクラークは言う。お嬢さんたちに手を出さない限りは、絶対に発砲しないってサツも約束してくれたんだ。

——スピードの出る車はどうなんだよ。

——道のかどっこに止めてある。

——何色だい？

——黄色。

——ほらな！ ヤンが叫ぶ。ほらな、奴らなめてやがる！

——ほかの車を頼めばいいだろ、とクラークが言う。

——確かに。かっとしてごめん、とヤンが言う。

クラークは金庫室の中に入ると微笑む。やつの微笑みはテレビの評論家や、保険のセールスマンやお気に入りの歯科医の微笑みだ。信じちゃいけないとわかっていながらも信じてしまう。クラークは茶色の瞳のエリザベスと双子に歯を見せてにっこり笑いかける。

——ちょっと聞いてもいいかな。今この金庫室にいる誰か、何か心配していることってある？ クラークは尋ねる。

4人の女性は黙りこくって、なんと答えたものやら分からないでいる。

——正直に言ってくれていい。本当に知りたいんだ、とクラークは付け加える。もしも何か怖いことがあるんなら俺たち知っておいた方がいいからね。君、とクラークは恥ずかしそうなエリザベスに向かって言う。君の怖いものって何？

——種類にもよるけれど蛇。それにクモ。クモはどんなのでも嫌い、かな。

——分かった。他には？

——魔女の話。

——オッケー。まさにこういうことなんだよ。互いに隠し立てしないってことが大切なんだ。そうしてこの難局を切り抜けるってわけさ。

クラークは訳知り顔に髭の生えた顎を搔くと、双子に向かってうなずいて見せる。

——君たち二人はどう？ 何が恐ろしい？

——二人がばらばらになること、と二人は声を合わせて言う。

——もちろん、誰だってそうさ。そして君は、名前はなんていうの？ クラークはクリスティンの方に顔を向けて尋ねる。クリスティンは大胆にも目をぱちくりさせる。心の中で、この人とはダウンタウンのどこかのディスコで一度踊ったことがあるんじゃないかな、と思っている。でも間違いかもしれない。もしかして、ただこの人の目つきやごわごわした髭のせいかもしれない。もしかして、今まで恋に落ちて、結局痛手を負わせられてきた男たちのだれそれにそっくりだというだけかもしれない。クリスマスに首に赤いリボンを付けた猫をくれて、そのあと彼女の親友、モニカと懇ろになったあの男の子。あるいは、彼女に絵——二人が一緒に月で幸せに暮らしている場面——を描いてくれ

て、その後、売りたいから返してくれと言ってきたあの男の子。あるいは、彼女の体の小さなしみ一つひとつに名前を付けて1か月後にはいなくなったほかの子。この人には同じような魅力がある。弱さを感じさせるような、いつも彼女をとてもしばしい気持ちにさせるにちがいないような。この種の寂しさには、何かしら人を裏切らない、信頼できるものがある。クリスティンはその場で自分がどうしようもなく彼に惹きつけられるのを感じる。

——だからさ、名前はなんていうの、とクラークが声を上げる。

——クリスティン・エーネマルク。

——オッケー、クリスティン・エーネマルク。君の怖いものは？

——核戦争が怖い。

——なるほど。ほかには？

——そして花火。大きな音がダメなの。

——なるほど。まだほかにあるかい？

——警察も怖いな。

——すばらしい。俺も警察はごめんだな。でもどうして警察が怖いのか？

——この銀行を襲撃するんじゃないかと思って。それで間違っただけ私達を皆殺しにしてしまうかもしれないから。

——まるで俺の胸の内を読んでいるみたいだ。ウィンクしながらクラークが言う。それはまさに俺が今一番怖いことなんだよ。俺たち、そんなことが起こらないようにしなくちゃいけないね。

——1999年に、お前はデンマークでヤクで捕まるぞ、とヤンが突然口走る。

クラークは友人のことをじっと見る。ヤンは自分よりほっそりしていて、鼻も長く、信頼できない顔立ちをしている。クラークは友人の肩を軽く叩いて、囁く。いいから、落ち着けよ、ヤン。

——ここから出たほうがいいんじゃないかな、とヤンが言う。できるだけ早く出たほうがいい。じゃないと皆ここで死ぬことになる。やつら配線を使って有害物質をここに送り込んでくるに違いないよ。

——いいか。車は用意されているんだ、とクラークが囁く。問題はな、人質

は一緒に連れていってはいけない、とやつらに言われたんだ。

——ということはやつらは俺たちを撃つつもりだな！ だからヘルメットが要るって言ったんだよ。ヘルメットがあれば、逃げられるのに！

——ノー、ノー、ノー、ノー、とクラークが言う。すべて論理的に考えようとしているからいけない。非論理的に考えなくっちゃ。これから首相に電話して、人質と一緒にここから出られるように言ってみるよ。ほかの車を用意させるんだ。そしてここから飛行機に乗せてもらって、スイスに行って、それからそこに着いたら、別の車を用意してもらってどこか隠れた場所に行けるようにするんだ。どこかの山とかさ。そこでみんな揃ってしばらく一緒に暮らしたいって言うよ。たくさん木の生えている場所がいいね。それに鳥もたくさんだ。そしたら森の中を散歩してさ、俺たちみんなだよ。そしていろんな鳥のさえずりに耳を澄ませて、互いにいろんなさえずりの何が好きだったかって話し合うんだ。

娘たちはみんな怪訝そうにクラークのことを見る。

——誰かそんなことは嫌だという人がいれば、今何か言ってほしいね、と彼は言う。

うら若き娘たちはそれでもみんな黙りこくっている。

——君、とクラークはクリスティンに言う。優しく、とはいえ信用できない微笑みを浮かべながら。君は僕と来るんだ。

ライフルを肩に斜めにかけて、彼は気を付けてクリスティンの手首を握ると一緒に長い廊下を歩いて銀行の待合室に行く。彼は黄色い電話の受話器を取ると、警察に通じるダイヤルを回し、それから受話器をクリスティンに渡す。

——自分の名前を言え。それから首相と話したいというんだ。もしも話させてくれないのなら撃ち殺されると言うんだ。

クリスティンは早口で受話器に向かって話す。

——なんて言った？ クラークが尋ねる。

——首相はいつでも話す準備ができていたって言った。

——よし。

クリスティンはクラークに受話器を戻す。

——パルム首相？ と彼は尋ねる。

相手の声は厳かで震えている。

——そうです。そちらはどなた？ と声と言う。

——そちらはどなただっけ？ どなた、ときたか。こちらはクラーク・オロフソンだ。銃を持っている。ここに座って銃口をかわいい女の子に向けている。その頭をこれから吹き飛ばしてやる所だ。

——いや、申し訳ない。相手を間違っていないかどうか確かめたかっただけだ。

——間違いなくその相手だ。

——承知した、と首相は答える。

——ああ、承知してくれよ。さて、知っておいてほしいことがある。人質と一緒にこの場から退出できないとあれば、一人ひとり撃ち殺していく。わかるね？

——もしかして、オロフソンさん……。

——いや、よく聞けよ。あんたがこれからすることを聞いてほしいんだ。

クラークはクリスティンをぐいと引き寄せると、右手でそのか細い喉をつかむ。受話器をそのピンクの口元に近づけると、必死に息をしようと彼女の唇がひん曲がる。

——1時間で道から警察を一掃するんだ。さもないと、殺戮を始めるぞ。

クラークは受話器を叩きつけると、クリスティンから手を離す。彼女は彼の手がかんで赤く痣になった喉元に手を当てて、彼を見上げる。

——ごめんね、こんなことしなくちゃいけないと、とクラークは言う。こっちがマジだっけことをわからせなきゃいけないだろ。わかってほしい。絶対に傷つけるようなことはしないから。

——どうしてこんなことするの？ そんなことしなくたって、つまり……。どうしてあんたはここにいるの？ この銀行を強盗しようなんてあんたは思ってたわけじゃないでしょ？

——思ってたんじゃないさ、とクラークは言う。でもヤンが助けてくれて頼むから。やつはこの世界の中で唯一の友達なんだ。牢屋の外にいる友達は、や

つ一人っきりなんだ。どうしようもなかったんだよ。

—あの人、あんたの友達なんかじゃない。友達ってあなたを助けて、あなたを幸せにしたい、っていう人でしょ。あなたのことを幸せにしたいもない誰かと友達になれるわけじゃない。

—僕たちみんなで幸せになるさ。一緒にね。小さな山でさ、動物も飼うんだ。ヤギとか、猫とかさ。君はその一匹に僕の名前を付けていいし、僕も別に君の名前を付けるよ。

—そんなこと連中は絶対にさせないわ。この建物から私たちと一緒に出させてくれるわけじゃない。

—そうするしかない。

—でもさせないわよ。そして私たち、みんな殺されるんだわ。

—いいかい、もしも殺されるんだとしたら、もう何をやっても無駄じゃないか。まずは安全な金庫に戻るしかないな。

しかしクリスティンは動こうとしない。彼女は喉に手を当てたまま、彼のことを見つめている。その目が涙でぬれている。クラークはこんな表情を見たことがあった。彼女は何かに裏切られたと思っているのだ。

—私、何が怖いかについて話したわよね、と彼女は言う。そして私、あなたにも死んでほしくない。間違ったことをやりにここに来たわけじゃないでしょ。あなたも私たちと一緒になのよ。どうしてあなたまで殺されなくちゃいけないの？

—いいかい、と彼は言う。本当にごめん。ねえねえ、と彼は囁いて、上着のポケットの中をまさぐる。ほら、これ、これ見て。彼は小さな銀の指輪を取り出す。これは俺の母親のものなんだ。彼女の指輪だ。彼女の結婚指輪なんだよ。君にこれを持ってほしい。幸運だ。これは俺の幸運のお守りなんだ。これを君にやる。これを持っていたら、何にも悪いことなんか起こらないから。

彼はクリスティンの小さな白い手を取るとその手の平に指輪を押し付ける。

—さあ、急いで金庫室に戻ろうぜ、いいでしょ？

クリスティンはうなずくと、クラークの先に立ってどんどん歩き始める。彼

といえば、信じられないほど小さいクリスティンのくるぶしと足を見つめている。何年かして、麻薬所持で刑務所に入っている間に彼はこの小さな足のことを考えて、自分は彼女に嘘をつき、こんなにも繊細で、無防備で、小さくて、壊れやすいものを傷つけてしまったので、永遠に呪われてしまったのだと悟ることになる。

その日が終わるまでに、警察は退去しないと決める。銀行強盗たちは再び首相に電話をかけようとする。その時には、ヤン・オルソンはもうあきらめかけている。彼は巨大な金庫室の片隅に座り込んでしくしく泣いている。警察の自動小銃はむなしくその足元に転がったままだ。クラークはこれからどうしたらいいのかよくわからないまま4人の若い女性たちを電線で縛り上げる。彼は、電線をわっかにして彼女たちの首の周りに結んだので、逃げようとしたり、電線をほどこうとすると、互いの首を絞めることになるのである。彼は誰もいない銀行の事務室をあさって、案内窓口のカウンターの後ろに非常に長いコードのついた一台の電話機を見つけたので、それを金庫室まで引きずっていく。

エリザベスのトランジスタラジオの電池が切れたので、クラークはロバータ・フラックの「キリング・ミー・ソフトリー（訳注：邦題は「やさしく歌って」だが、英語 [Killing Me Softly] をそのまま訳すと「やさしく殺して」となる。クラークたちの置かれた状況と人質の状況をそのまま表すブラックジョーク）」を何度も何度も口ずさむ。その後、水を打ったような静寂の数時間が刻まれる。外はもう真夜中に違いない。クラークはまた金庫から出て、長い廊下を這うように進んでいく。明かりのついていない待合室に目を凝らす。大理石の床は夜の暗闇と何十台ものパトロールカーのサーチライトの明るい光を映し出している。クラークはくそっと毒づく、急いで金庫室に戻る。受話器を取り上げると、首相を呼び出し、それから叫びだす。

——どうしてまだサツが外にいるんだよ。

——人質が解放されるまでは引き下がるわけにはいかないと言っていた。

——馬鹿にするなよ、てめえ！ クラークは叫ぶ。この女たちを助けたかないのかよ？

——助けたいとも。

——いや、そうは思えねえな。すぐにここから出たいんだ。人質も一緒に連れていく。スピードが出て、黄色じゃない車を一台用意しろ。ここから逃げる飛行機を用意して、スイスの山に俺たちを連れていけ。

——オロフソンさん、そんなこと全部を準備することはできない。

——おい、まじめになれよ！ さもなきゃ、この子たちが一人ひとり撃ち殺されていくんだぜ。いいか、よく聞けよ……。

クラークは金庫室の中を見渡し、それから電話をクリスティンのところまで引っ張っていく。

——さあ、言うんだ。クラークはすごむ。お前たちをこれから殺していく。お前たちも一緒に来れないのなら。

クリスティンは目をつぶり、クラークはその耳と口元に受話器を押し付ける。

——首相、彼女は囁く、首相は私たちを非常な危険にさらしています。この人たちは、私たちを傷つけたくはないのです。でもそうせざるを得ないでしょう。

——みんなあなたたちの身の安全を危惧しています、と首相は言う。一緒に逃げたらやつらは、すぐにあなたたちを殺すんじゃないかと思っているのです。

——首相、クリスティンは言う。あなたの態度にはまったくもって失望です。お願いですからこの銀行強盗たちと一緒に行かせてください。

——いいかい。首相は静かに言う。皆して君たちのことを案じ、祈っているんだ。そこから無事に救い出す。約束する。ただ、君たちを連れてやつらを出すわけにはいかないんだ。

——なんて言っている？ クラークが尋ねる。

クリスティンは肩をすくめて見せる。

——一緒に行かせるわけにはいかないんですって。

クラークは受話器を叩きつける。弱々しいベルが一度鳴るが、その音はこの大きな金庫室中に響き渡る。

——さあ、どうしよう。両手で頭を抱えていたヤンは顔を上げて尋ねる。その顔は赤らんで、下唇がぶるぶる震えるのをとめることができない。これからどうしよう？

——やつらが気を変えるまで待とう、とクラークは言う。

ヤンは首を横に振る。そしてまたしくしくと泣き出す。

——1996年にお前はオスロの銀行の外で捕まるぜ、と彼は囁く。

——そうかもな。

——そのころにはもう俺たち、友達なんかじゃねえ。

クラークは舌打ちをしてヤンの肩をぼんぼんと叩く。

——もうそれぐらいにしとけよ。

クラークは自動小銃を取り上げると行ったり来たりし始める。そして考える。その間もヤン・オルソンは泣きやもうとはしない。クリスティン・エーネマルクはクラークのことを見て、二人がもしも親友だったら、誕生日に彼はどんなプレゼントをくれるだろうかと考える。エリザベス・グルベリは寝てしまい、何か寝言を言っている。サンドラとダイアン・エークルンドは黙ったまま互いに瞬きし合っている。これは二人の間の秘密の合図でほかの人には理解不能なのだ。クラークが行ったり来たりをやめてみると、みんな揃って諦めたかのような様子である。彼は金庫室の扉の前に座り込むと、自動小銃の銃口を使って、ほこりの積もった床にスイスの山の絵を描いてみる。

3日目の朝が来る頃には、銀行強盗たちはすっかり意気消沈してしまっている。クラークは爪の垢をほじりだし、ヤンは顔を上げようともしない。9時ごろ、遠くから歌が聞こえてくる。まるで金庫の暗い個室の中に閉じ込められた鳥が鳴いているかのような歌。やがて頭上のしっくいにひびが入り始め、その場でガタガタ、ぶるぶると振動し始める。

——いったいぜんたい何なんだ。クラークは銃をつかんで言う。

小さな穴が現れてゆっくりと広がっていく。

——魔法をかけやがったな！ ヤンは穴を指さして甲高い声で言う。気を付けていないと、あいつらその手を使うとわかったのに！

クラークは穴の真下に立って微笑む。

——ドリルで穴を開けているんだ。

ちょうどその時電話が鳴り始める。クラークは急いで電話のところに行く
と受話器を耳に当てる。

——もしもし？

——警察だ。金庫の天井に穴を開けている。これから小さなカメラを穴の中
に入れる。人質が皆生きていますかどうかを確かめたい。

クラークは声を上げて笑い出す。彼は顔を上げてその穴をじっと見る。とそ
の瞬間、小ぶりの黒い機械が小さな穴から姿を現す。クラークはその下に立っ
て、微笑む。彼は受話器を耳に当てなおし、言う。それで、何が見える？

——どうやら皆生きていますようだな。

——ちゃんと約束したとおりだろ。さあ、俺たちはここから出てもいいか
な。

相手は電話を切る。そして小さな黒い機械は姿を消す。

——もしもし？ クラークは言う。もしもし？

彼は受話器を置いて、金庫室の中を歩いて小さな穴の中を覗き込む。その瞬
間、また別の音が、聞き慣れない音、何の音楽もメロディーもそこにはない物
音が鋭く響いてくる。エリザベス・グルベリは取り乱して泣き始める。

——蛇？ 彼女は金切り声を上げる。蛇なの？

クラークは小さな穴を覗き込んで、笑い始める。

——違うよ。これはね……。

突然眉を顰める。その音はだんだんと大きくなっていく。

——ガスだ。

彼は武器を投げ出して自分のシャツを引き裂く。それで自分の顔と口のまわ
りを覆うが、時すでに遅し。彼の喉はもうふさがり始める。そして鼻水と涙が
どつとあふれだしてくる。4人の娘たちを逃さなくてはと思う。コードの小さ
な結び目を解こうともたついている間に、涙で息が詰まってくる。エリザベ
スの電線を解くと、彼女は床に倒れる。それから一緒に縛り付けられていた双子
の姉妹を解く。彼はどうにかクリスティンの首と両腕の電線を解く。彼女はせ

き込み息を詰まらせながら、煙の中、手を伸ばしてクラークのシャツをつかむ。二人は一緒に床に倒れ込み、顔を覆う。彼女の手はしっかりと彼の花柄のシャツをつかんでいる。金庫室の隅ではヤン・オルソンが相変わらずしゃくりあげ、ガスが彼の涙を銀色に光らせている。彼は両腕の中に頭を突っ込み、今となっては例のアメ車からあのろくでもないハジキなんか盗まなきゃよかったと思っている。機動隊が金庫室の扉を開け放つときには、ヤンはもう降参しようとしている。彼は両手を頭の上に挙げて這い出して来る。その顔は真っ赤で、その格好はまごうことなく決定的な敗北の姿勢である。

オルソンとオロフソンは誘拐と強盗のかどで起訴され処罰される。ヤン・オルソンは裁判で弁護人を立てないことにする。訴訟手続きの間、彼は数名の重要な参考人に、もしよかったら自分のために歌ってくれないかと頼むことになる。クリスティン・エーネマルク以外は皆断る。彼女は「フレール・ジャック（訳注：日本語では「鐘が鳴る」）」を歌うことだろう。すると、ヤン・オルソンは頭を被告席の机の上に載せてだんだん眠りに落ちていくことだろう。裁判官は静かに彼を起こそうとするだろう。オルソンは裁判官たちに謝ることになる。こういったもろもろはすべて公式の裁判記録からは削除される。

クラーク・オロフソンは裁判中に髭をそることになる。彼は独りぼっちの女性たちからいくつもの結婚の申し込みを受ける。そのうちの何名かはもうすでに刑務所に入っている犯罪者たちと結婚しているのだが。判決が下されると、オロフソンはこう主張するだろう。この強盗と自分は何の関係もなくそこにいたのはただ、親友が人質に手を出さないようにするためだったと。スウェーデンの上訴裁判所は、最終的にオロフソンは無罪であると認め、ヤン・オルソンとの友情はそれからほどなくして終わりを迎えることになるだろう。クラークは釈放され、1年とたたないうちに再逮捕されることになる。

犯罪学者で精神科医のニールス・ベジェロットは「ストックホルム症候群」という言葉を作り出し、テレビニュースで紹介する。そして、試練の中で人質が

強盗たちに対する共感を築いていくという状況を説明するだろう。彼はかかわった娘たちが強盗自身より警察のほうが怖かったと述べていたことを指摘し、この状況についていくつかの論文を書くことになる。彼はそれからヨットを購入し、その堂々たる舳先にそって銀色の文字で「ストックホルム症候群」と書き入れるのだ。誰も彼にこのヨットに乗せてくれと頼む人はいない。ただの一人だっていないだろう。

無罪釈放されてからクラーク・オロフソンは生涯にわたる友情をクリスティン・エーネマルクとはぐくんでいくことになる。クラークが服役していないときは、祝日と誕生日に、二人はプレゼントを交換し合う。ある年のクリスマスにオロフソンはエーネマルクに白い兔を一匹、穴を開けた箱に入れて贈る。その首には青いリボンが結ばれていることだろう。兔は董の香水の匂いがする。近所のペットストアから盗んできたものだ。この兔は今までクリスティンがもらった中で一番素敵なプレゼントになるだろう。クラークとクリスティンは何か嫌なことがあると、互いを訪ね合うことになる。でもクラークが刑務所の外にいたことがだんだん少なくなってくるにつれて、この訪問は難しくなっていく。しばしば互いの夢の中に相手が現れると、二人は電話をかけ合って夢の中で見たばかりのことを話し合うことだろう。クリスティンの夢の中ではクラークは氷でできた手となって現れる。クラークの夢の中では、クリスティンは愛らしい白い鳩なのだ。

幻の飛行機 (Ghost Plane)

空港は不気味だった。ほとんど人影もなくながらんとしていた。ビリーはチケット販売嬢の目を見据えて、深呼吸すると、今一度、連れの娘が何かかなり深刻な神経症に陥っていると必死に説明しようとした。だから二人は遅れたのであって、だからどうしてもこの飛行機に乗せてもらわなくちゃいけない。そのことわかります？ 駄目だ、彼女に通じているとは思えなかった。もう一度はじめからゆっくり言おうとした。実にくれた、大げさすぎるほどはっきりとした英語で。でもカウンターの後ろに座ったこの小柄なベリーズ的女性は、た

だ、うなずいて、肩をすくめて、それから彼女の腕時計を指さした。予定通りの出発時刻からはもう 30 分が過ぎていた。

「この子ね、超危ないんだ」とビリーは強く出た。ニコールはただ肩をすくめて、あくびをして、おもむろに片手で口元を隠した。彼女は黙って二度瞬きして、ビリーは彼女の髪の毛に目をやった。錯乱した勢いで彼女が昨日切った髪の毛は一方が長く、ほかは恐ろしく短かった。額はまだ鉄の刃が当たってきた小さな傷跡で、赤かった。「この子、マジで気がおかしくなっちゃったんで、とにかくクソすぐにでもあんたのこの国を出なくちゃいけないの。」

チケット販売嬢の回答はこうだった。次にご利用可能なフライトまで待ってもらわなくちゃいけません。一番早くて明朝になりますね。

これではビリーの気が済まない。絶対に困る。ビリーはミラーサングラスをきちんとかけなおして、トロピカルな花柄模様のシャツのしわを手でのばした。「オッケー、いいかい、このお嬢さんは助けが必要なの。即刻国に帰らなくちゃいけないの。帰れば医者とかなんかが、どうして気がおかしくなっちゃってるのかわかるでしょ。だから、どうして俺たちは乗ることができないわけ？ まだ飛行機はゲートの前に止まってるじゃないか。」

小柄な女性は頭を横に振って言った。「ノーノー、明日ね、サンキュー。」彼女は翌朝のフライトのエコノミークラスの席を彼らのために二つ取って、二人のパスポートを再度調べて、遅れないように念を押すと、サンキューベリマッチ、グッバイ、……で終わり。

二人は搭乗口へと続く大きな青い金属製の扉が突然閉まるのを恐怖の面持ちで見守った。次の瞬間、大きな白い飛行機は滑走路に向かって動き出した。ビリーは少女の手を握ったが、愛情からでは毛頭なく、この悲惨な 5 日間の旅行に終止符を打つ、最短で最もシンプルな方法を見逃した仲間のよしみからだった。飛行機が飛び去るのを見ると、少女は彼の握った手を放し、二人ともたちまち絶望感に襲われた。

「今晚のホテルを取らないと」とビリーは言う。「タクシーを拾ってどこか近くのホテルを見つけよう。心配いらない。大丈夫だから。」

「どうでもいいわ」と少女は囁く。「もうあの飛行機に乗っているんだもの。」

ここから飛び立っているの。ここからいなくなってこのひどい場所やあんなのことなんか二度と考えない。」

「部屋を見つけなくちゃ」と彼は繰り返した。

「私に言わせればね、あんたも誰もかれも、私にとってはもう死んでるの。」

「すげえな」とビリーは言った。

「今必死になってあんなに大声上げないようにしているんだから」と彼女は息を殺していった。

「それはラッキー」と彼は言った。ビリーは二人のバッグを手にとって、おぼつかない足取りで出口に向かってよろよろと歩き出した。その瞬間、ダークスーツに身を包み、笑みを浮かべたベリーズの男が二人の前に立ちはだかって、胸につけた輝く銀色の認証バッジを突き出した。

「こんにちは。通報が入ったのですが、お連れが何やら心の病に苦しんでおられるとか。ご自身やほかの乗客に危害が加わらないように安全を確保させていただきます。」男性は少女に微笑みつつも、以上のことを非常な速さでまくし立てた。「明朝出発なさるおつもりなら、ご搭乗の前に短い心理テストを受けていただきます。」

「え、まじかよ。」ビリーは尋ねた。「そんなことほんとにできるはずないよね。」

「ええ、できますとも。しかも今すぐに。もしも計画通りにここをお発ちになりたいのならね。」

ニコールはビリーのことを見て、目を丸くした。彼はうなずいて、言った。「何も言わなきゃよかったんだ、だろ？」

「そうよ、言わなきゃよかったのよ、このバカ。」

「僕も一緒に行ったほうがいい？」

「いいや。ごめんだわ。」

「どれくらいかかるのですか？」ビリーは認証バッジをつけた男に聞いた。

「1時間です。」

「わかった。1時間ぐらいしたらここで待っているから。」彼は飛行機会社のカウンターを指さした。

「がんばれ。いいかい、まともな人間だったら言うだろうことだったら、なんでもいいんだから。」

「ま、面白い。」少女はふんと笑って、ダークスーツを着た男について廊下を歩いていくと、小さなオフィスの中に姿を消した。おじけづいて暗い廊下をとぼとぼと歩いていく彼女を見送りながら、ビリーは思い返していた。どうしてこの子をこんなに好きなのか。ひ弱だし。今まで会った中でまさに最もか弱き人間と言っていい。若くて金持ちで甘やかされて、春休みを楽しんでいるトップレス・ガールたちのドキュメンタリービデオに出ていたのだ。このシリーズの二つの巻に出演していたっけ。彼女は自分より10歳ぐらい若かったが、頭はずっとずっとよかった。読書家だ。とにかく本を読んでいた。あらゆる種類の本を読んでいた。一度誕生日に一冊の本をくれたことがあった。ビリーといえば、あたかも宇宙から落ちてきた赤々と輝く岩のようにその本を見つめたものだった。最初に、とあるパーティで出会って、すぐにブラジャーを着けていないことが分かった。とっても薄手の白いTシャツを着ていて小さくてティーカップみたいなその本当にすばらしい胸の形にはとにかく惹きつけるものがあった。ビリーは夢見心地で一晩中彼女を追いかけることになった。タクシーに乗って、支払いを割り勘にしようと決めただけれど、実は向かっている方向はビリーの帰る方向とは真逆だった。車の中で二人はいちゃつき始めた。ニコールのキスは素晴らしかった。彼女は自由奔放にキスを楽しんだ。まるでいちゃいちゃするのが生きている中で最高の喜びみたいに。その上、彼の手を自分のピンクのスカートの下に導くので、彼の指はそのまま下へと降りて行ってパンティーの柔らかな緑の部分に触れた。彼女は彼のズボンのジッパーを探り当て、その指がベルトを外し始めたところで、やめた。彼のことをいぶかしげに見つめると、眉をひそめて、言った。「もうこんなことやめなくちゃ。」それでもそのままいちゃつくのはやめなかった。数日後、ついに関係が最後まで行くと、彼女は最初こそ同じように感じていたが、それからあとはずっと笑い通しだった。ビリーが今まで出会った中で、彼女は、セックスを本当に楽しむことができる唯一の子に思えた。それは素晴らしかった。だからそもそも、彼女と一緒にベリーズに行かないか、と持ちかけたのだ。知っている誰よりも一番一緒に

いて楽しかったから。でもわかったことがある。時々、いや2回に一度は、正真正銘、イカれているってことが。

それは旅行初日の午後、到着した後で小さなホテルの部屋で荷をほどいているときに起こった。ニコールは服用している抗不安薬をすべて忘れてきたことに気づいたのだった。うかつにも、ビリーは、今までいろいろあった中で、最高のことなんじゃないかな、と言ってしまったのだ。心配するなよ、と言ってしまったのだ。最初からそんな薬必要なかったんじゃないか、と言ってしまったのだ。もちろん、ビリーのやることなすこと、今まで間違いだらけだった。そして、このいまいちの医療的アドバイスも、まったくもってその例外ではなかった。

彼女の精神的崩壊が起こった時はまさに次のような感じだった。ビーチパラソルの下で3日間座ったまま泣きながら過ごして、どうして自分が何も食べないのか彼と言いつ争っているうちに、ニコールはホテルのバスルームに閉じこもったまま、4~5時間、扉を開けるのを固く拒否した。ビリーは部屋の中を行ったり来たりして、10分かそこらごとに扉を叩いた。知恵を振り絞って言えたことは、「ニコール、大人げないよ。それほど俺に怒っているのなら、この忌々しいドアを開けろよ。話し合おうよ。こんな風に置き去りにされたら、俺、馬鹿みたいじゃないか。」少女はこんな文句を聞きながら、鉤爪みたいな足がついた小さなバスタブの中に座って、ヘア 드라이ヤーをつかむと、コンセントに差し込んで、浸かっているバスタブの中に放り込んだ。何も起こらなかった。ヘアドライヤーは新しいモデルだったので、事故防止機能がついていたのだ。これに怒って、彼女は長くて、柔らかくて、ブロンドの自分の髪の毛を切ろうと決めたのだ。切り終わってみると、半分はまだ肩の長さだったが、残りはまるで羽が生え変わるときみたいに、ギザギザになっていた。とうとうバスルームの扉を開けてくれたのでビリーが入ってみると、彼女は裸で湯船に浸かっていた。皮膚がふやけて、ヘアドライヤーがお風呂用の高価なおもちゃのように彼女の横に浮かんでいた。ビリーは決めた。自殺なんてもう自分の手に負えない。そこですぐに帰りの飛行機を予約した。

空港の外にはタクシー乗り場、軍の施設、そして緑がかった古い工場があった。今は7月。熱気のせいですべてが銀色に見える。最初はタクシーに乗ってベリーズシティに戻り、今晚のためにそれほど高くない宿を予約して、空港に戻り、ニコールと落ち合う予定だった。しかし日なたに出てみると、行って戻ってくるよりもここでニコールを待ったほうがいいと思なおした。

浅黒い肌の男の子が古びた赤い自転車に座ったまま、タクシー乗り場近くの道のヘリに両足を載せていた。少年はビリーを念入りに見ると、自転車の前につけた針金のバスケットを指さして、花火はほしくないかと尋ねた。結論からいえば、確かにビリーは、花火がほしくてたまらなかった。実際、こんなに花火がほしいと思うのはいつぶりだろう。思い出せない。少年にアメリカのードル紙幣を渡した。少年は好きなものを選ぶように言った。中にはいろいろなロケット花火、音物花火、打ち上げ花火、ローマ花火が入っていて、変わった名前がついていた。「ウイドウズ・ラウンドロー未亡人の洗濯物」とか、「スパーキング・フライング・フィッシュきらきらトビウオ」とか、「ブルーミング・ファイア・マンション花開く花火館」など。バスケットの底にはほかの種類も入っていた。安っぽい紙製の三輪車に乗った紙製の動物たちである。ビリーはそれらからも一つ選んだ。もう誰も乗っていないような旧式の自転車に赤いトルコ帽をかぶって乗っているサル、そして2本のことさら名前がついていない青いロケット花火を買った。彼は少年の頭を撫でると、そんなことをしたことに後ろめたくなってもうードル渡した。

ニコールは信じられないことに、異常なしの健康証明書ももらって放免された。とはいえもちろん、約束の場所で待っているわけはなかった。代わりに外でタバコを吸っていた。「喫煙禁止」の表示の真下で、わきの下をかきむしりながら。

「いったいどういうわけだよ、ニコール。」ビリーは尋ねた。

「わきの下を蚊に刺されたの。まじでむかつく！」

「いや、そうじゃなくって。よりもよってどうしてそんなところでタバコ吸

ってるんだよ。ここいらではみんなお堅いんだ。すぐ真上に掲示が出てるだろ。」

「うざいなあ、ビリー。もしもタバコが吸えないんなら、誰かのこと、殺してやるから。」

「わかったよ。町に戻って宿を取ろう。さっさと吸い終わって行こうぜ。」

「ビリー、これから国を出て帰るまで私に話しかけるのは禁止よ。」

「いいよ。」

「じゃあ決まりね。このくそ野郎。」

ビリーは、彼女をタクシーに押し込めると、だだっ広い草ぼうぼうの野原を抜けてベリーズシティに戻っていった。景色は無味乾燥で、人氣がなく、時おり日にさらされて水色になったコカ・コーラの広告板や飲酒運轉への注意を呼びかける野外看板が点々と現れる程度だった。少女は押し黙り、おそらく何か考えているようだったが、しばらくして彼のことを見ると、その小さくて憎らし気な目を細めてにらみつけた。

「空港のあの男、あんたのこと父親かって聞いたのよ。」馬鹿にしたような口元でそう言うと、小さな白い歯が少し見えた。

ビリーはうなずいたが何も言わなかった。

「だからここに来たってわかったの。だって本当に父親のことが嫌いなんだから。父親のことが大嫌いだから、こんな生き方をして結局自分にお仕置きをしているんだわ。」

「すごいね。」それがビリーのせりふだった。タクシーの窓の外を見つめたままだった。「そいつあ、まったくもって新事実だね。」

ニコールは、二人が見つけた部屋、どうせ6時間しか7時間ぐらいしか滞在しない部屋が、しょぼくて安っぽいと文句を言った。確かに彼女の言う通りだった。ニコールがシャワーを浴びていると水が出なくなった。だから彼女は出てくるしかなかった。髪の毛は小さな白いタオルで覆っていたが、それ以外、すっきりとしてやせた体は裸のままだった。彼女は小さなベッドで彼の隣に横になると、ため息をつき、それから言った。「あんたの旅行をめちゃくちゃにして

ごめんね、ビリー。今、私、生きててそんなに幸せじゃないの。わかっているわよ。みんな私のこと、本当に好きじゃないって。自分だって、心底ほんとに嫌になる。」彼女は少し鼻をすすって、それから向こうを向くと、両手で顔を覆った。「わかってほしいとは言わない。でも人にこんな風にされるのはもうたくさんなの。もうこれ以上こんなひどい扱いを受けるのは耐えられない。」

「じゃあ、自分がひどい行動するのをやめればいいんじゃないか」と彼は言った。

「それ、どういう意味？」

「なんでもないよ。君が最低な行動をするから、みな最低な扱いをするんだろ。」

ニコールは彼のことをにらみつけた。その下唇が震えていた。「あんたなんか超嫌い、ビリー。」彼女はそう言って、また泣き始めた。「本当よ。ここまで来たのは、あんたがいい人だと思ったからよ。あんただけ何もかも含めてそっくりそのまま受け入れて、私を本当に好きでいてくれると思ったからよ。」

「おい、またかよ、ニコール。」

ビリーは身を起こすと両足を床に下ろした。ズボンのボタンをはめた。熱帯の日の入りを最後に見ておくのなら今だろう。バックバックをつかむと、外に出た。ベリーズシティの大半はそのころには色とりどりの明かりで照らされていた。小さな食料雑貨店や街角の店には痩せた子供たちが集まって笑ったり、ガラス瓶のソーダを飲んだりしていた。彼は幅の狭い縁石に腰を下ろすと、タバコを探り当て、ライターを取り出した。ちょうどその時、花火のことを思い出した。あ、そうだ。バッグの中に花火があった。青いロケット花火の一本を地面に立てて、芯に着火すると、気を付けて後ずさりした。花火はただ、燃え上がっただけで、離陸することもまったく音を立てることもなく、小さな白い炎に包まれたただけだった。彼はいまいまいしい思いでサンダルでそれを踏みつぶした。もう一本のロケット花火も試してみたが、そちらもただ、火が着いただけで横に倒れ、そのままお陀仏、不発に終わって、がっかり……。彼はトルコ帽をかぶって小さな足が自転車のペダルにつけられている紙のお猿を取り出して、道の上に置いた。それからモーターの部屋の窓を見上げて、眉をひそめ

た。突然自分が彼女に言ったことを思い出して胸が痛んだ。彼女を無理やり連れてきたことを思って最悪な気持ちになった。彼女がどんな状態か、つまり「狂っている」ことをよく知っていたにもかかわらず、ほかの何者かになってくれるように期待していたのだ。この旅行の間中、あの子に優しくしてきたとはいえない。薬を飲まなくてもいいなんて言ったことはまったくもって大失敗だった。謝るのならおそらく今だ、と思った。両手をメガホンのように口に当てて、名前を大声で呼び始めた。返事はない。彼は彼女の名前を呼んで、呼んで、呼び続けた。街角にいたベリーズの子供たちは、彼のことをじっと眺めていた。彼らの小さな犬たちも彼に唱和し始めた。やがてニコールは扉を開けてバルコニーに出てきた。彼女の髪はまだ白いタオルに包まれていた。そして胴体には白いシーツをぐるっと巻き付けている。彼女は本当に愛らしかった。まるでお姫様のような。小汚いモーターのシーツにくるまれていても、彼女には何かしら知的で洗練されたところがある。それはその首の長さや身のこなしからわかるのだった。本当は賢い少女なのだ。それなのに、おろかな、あまりにおろかな行動をとることに慣れてしまっているのだった。彼女は今、わざとつまらなそうなふりをして、タバコを吸っている。手すりに寄り掛かったその体のしなやかで華奢なこと。

「今度は何よ。」彼女は彼のことを見下ろしてそう聞く。

ビリーはひざまずいて芯に着火すると、急いで後ろに下がった。小さなお猿は白い炎と共に爆発して、道の向こうにすっ飛んでいくと、小さな野原に飛び込んで見えなくなり、そこからポンと飛び上がって、夜空に消えていった。少女は驚いた。そんな顔を見せたのは、たぶんしばらくぶりだった。それから口を大きく開けて手を叩き始めた。

ビリーは猿のようにキヤッキヤと声を上げて、前後後ろへと跳ねてみせた。大笑いで彼女の顔は赤くなった。荒い息の大きな音を鼻孔から立てている。

その音を聞くと、その鼻息交じりの大笑いを聞くと、ビリーは思った。「やばい、やばい、ヤバイ。惚れちまう。」そこに立ったまま、目をぱちぱちさせてバルコニーの彼女を見上げる。それからモーターの階段を全速力で駆け上がり、バルコニーから彼女を部屋へと追いたてた。ちょうどその時だ。彼女は大

声で笑い、きゃあきゃあ声を上げ始めた。

光の空港 (Airports of Light)

とある悲しいお話。ポールとガールフレンドのエリザベスが小型車の中で言い争いをしていると、それは起こる。それが最初に起こるときに、二人はラジオで今かかっているポップスを誰が歌っているのかについて言い争っている。エリザベスは自分が間違っていることはわかっているけれど、いつもの間の抜けた表情を浮かべているポールを見ると、おいそれとそれを認めたくない。そして歌の最後にDJが曲のタイトルとアーティスト名を述べると、ポールは首を一度大きく振って、さも意味ありげに一方の眉毛をくいと上げてみせるので、彼女は目を白黒させて大笑いする。なんて、馬鹿面なの。「正解！」と彼はいかにもうれしそうに歯を見せて、叫ぶ。「俺は無敵だ！君もこの世界も何もかも思いのままなのさ。」エリザベスは一瞬だが彼の顔をじっと見る。その顔は昔みたいにほっそりしていないし、そのほっぺたを2~3日剃っていないブロンドの頬髯が覆っている。そして彼の上着は肘のところでさけ始めている。彼女はまるで初めて会ったかのようにまじまじとポールを見つめる。私、まだ彼に首ったけなんだと思う。振り返って助手席側の窓から町の景色が過ぎていくのを見つめている。突然彼女は何かがひどくおかしいことに気がつく。きちんと呼吸ができない。心臓が鼓動をやめている。血管の中の血球が、なぜかしらうまく流れていない。体がこわばる。手足が力を失い、ほとんど死んだようになる。彼女は目を大きく見開く。息を今一度吸い込もうと必死になる。ポールはまだ気がついていない。いまだに自分の小さな勝利に酔いしれている。ようやくこちらを見てラジオの音を小さくして、車の流れから外れて、車を道の脇に止めると、不思議なことが起こり始めている。白い光が、小さいいくつもの白い光がエリザベスの胸のど真ん中で瞬き始めているのだ。そして彼女の叫び声はその開いた口から沸き起こると、遠くで響いているように聞こえる。まるで彼女が雲の合間から落っこちてくるかのように。

緊急治療室ではさまざまな検査が行われ、コルコタからの医師が呼びにやられる。そして4時間ほどたったところで、診断が下る。告げられたことはこう

だ。まだたったの33歳でほかの面では概して健康であるものの、エリザベスは深刻な病を発症していた。その大切な細い血流の中に小さな町が育ちつつあるのだ。彼女の胸腔の周辺を小さなビルや人々がどんどん埋め始めている。ラクスマンというやせてあご鬚を生やし、汚れためがねをかけたコルカタからの医師は、何枚も何枚もレントゲン写真を撮らせる。やがて、ポールとエリザベスは驚くことになる。この厄介な形態物は20世紀初頭のとある近代都市の地図とぴったり重なるのだ。

「おもしろくないですね」と医師は述べる。「そうだな。1900年、1910年といったところでしょうか。聴いてみてください。路面電車が走っていますよ。」

ポールはエリザベスの胸に耳を近づける。「どういうこと、本当に路面電車が走っているぞ」と彼は言う。「それに……礼拝も行われているみたい……。オルガンと人々が歌っているのが聞こえる。いや、祈っているんだ……。」

医者ほうなずく。「そう、彼女はもう1910年から1915年あたりです。これはいけない。」

「それってどういう意味ですか？」とポールが尋ねる。

「今はまだ町には石炭しかありませんが、すぐに電気が通ることでしょう。それこそあなたたちが見た明かりです。あなたが述べられた奇妙な感覚ですよ。」ラクスマン医師は小さな白いハンカチで額を拭く。「中の誰かがどうやら電気を見つけ出したようですね。もうすぐ光がどンドンともり始め、ともったら最後、消えることはないでしょう。」

エリザベスは青い目を閉じる。「なんですって」と彼女は尋ねる。「つまりこの町は……。」

「町じゃありません。これは町の特性を持った腫瘍です」と医師は正す。

「つまり、この腫瘍は、手術で取ることはできないのでしょうか。」

「とんでもない、それは無理だ。」ラクスマン医師は言う。「そのうち摩天楼が建つことでしょう。」

「なんですって。」

「これを見てください。」医師はレントゲン写真を持ち上げて、その茶色い指で小さな白い点を差しながら言う。

ポールは目を細める。エリザベスは彼の横で前かがみになる。

「これ、なんですか？」ポールは尋ねる。

「これはですね、たぶん工場を建てているんだろうと思います。ここのこの形が見えますか。煙突らしきものが見えるでしょう。もうすぐこの腫瘍は工業化されるに違いありません。わかります？ 通りがきれいに舗装され、汚染物質を出す工場が建ち並び、摩天楼、空港、小さな自動車が登場します。この工業化が始まり、町の混雑がさらに進んでしまうと、ほとんどそれと同時にあなたは死ぬことになります。この調子だと、あと2、3時間の命でしょう。」

エリザベスはポールのコートに額をつけるとすすり泣き始める。永遠と思えるぐらい長いこと泣いて、それから顔を上げると、ポールがその横で声を立てずに泣いている。医者は姿を消し、緊急治療室の瞬く白い光は、エリザベスの白い上着の内側で光っては消え、を繰り返している不思議な瞬きに似ている。突然彼女は身を起こすと、何かを囁き始める。歌だ。ポールが彼女を見つめると、エリザベスは目を拭いて、静かなちょっとしたメロディーを口ずさんでいる。「心から歌を解き放つ。」彼女は優しくもの悲しく、はっきりと聞き取れない声で歌っている。

「なんの歌を歌っているの？」ポールは彼女に聞く。

「わからない。自分で作ったの」と彼女は言う。「急に頭に浮かんできたの。」

彼は今一度耳を彼女の胸につけて聴いてみる。「違う。ここから聞こえてくるんだ。これは……たぶんデューク・エリントンだよ。はっきりとはわからないけれど。」

「あら。」エリザベスが言ったのは、ただそれだけ。

病室で、ポールとエリザベスは手を取り合っている。消音しているが小さなうなり声を上げるテレビ画面の光が、二人の顔を優しい光で包んでいる。エリザベスは毛布を首まで引き上げているので、小さな町の光のせわしない瞬きははっきりとは見えない。部屋の外では雪が降り始めている。二人とも、一緒に雪が降るのを見るのはどちらにとっても最後になるのだと考えている。ばかげたなんでもないことが、今では意味を帯びてくる。最後に彼女が食べる白い粉

砂糖をかけたカップケーキ。最後に彼女が履く一足の靴下。最後に彼女が飲むホットチョコレート。最後にホットチョコレートを飲んで彼女の舌が熱さでひりひりするとき。最後に舌をやけどすることを彼女が心配するとき。最後に彼女がくしゃみするとき。最後に彼女が髪の毛をぬらすとき。最後にだんだん年を取っていくことを彼女が考えるとき。最後に彼女が眠りにつくとき。最後に彼女が夢を見るとき。

エリザベスの点滴が換えられている間に、ポールは外に出て片手一杯の雪を持って戻ってくる。言葉もなく、二人は座って静かに雪を食べながら外を見ている。二人とも何も言うことも行うこともできない。何を言おうとやろうと、頭に浮かぶのは同じ恐ろしく不当な出来事ではないから。

しばらくあとで、わびしげな灰色のネクタイを締めたラクスマン医師が入ってくる。すでに真夜中を過ぎていて、エリザベスはついに眠りに落ちている。ポールは窓際に置かれた居心地の悪いプラスチック製の椅子に座って、雪が降るのを見ている。すると、医師がこちらに入ってくる。ポールは目をしばたたかせて医師を見上げるが、わざわざ微笑む気も起こらない。

「寝ていらっしゃるのですね。」ベッドの足元に立って、医師は尋ねる。

「だと思います。眠りたくないと言っていたのですが。」

「そうですね」と医師は言う。「よくわかります。」

ポールはうなずいて、自分の両手を見下ろす。この医者殺してやりたいと思う。外に出て行って誰かを殺してやりたいと思う。でもそれからふと気を緩めて、この医師のせいじゃないんだと考える。誰かの責任ではないのだとしたら、誰の責任でもないということになるが、ポールはあまりに疲れて悲しくてそんなことはもう考えられない。

「彼女のことを、この子のことを愛している、でしょ？」と医師は尋ねる。

ポールはうなずく。胸が何かで一杯だ。悲しみ、罪の意識、恐れ、痛み、どれでも選ぶがいい。だからそんなばかげた質問に言葉で答えることなんかできない。

「彼女がいってしまうのを見るのは耐えられない、そうですね？」

ポールは首を縦に振る。ああ、神様、彼は泣き始める。気がつくと医者を目

もまた涙で一杯になっている。

「いってしまうのを見るのは耐えられない、だって彼女をこんなに愛しているから。そうですよね。」

「はい」とポールははっきりしない声で言う。「お願いします。」あふれ出る涙にむせ返りながら尋ねる。もう答えはわかっているのだけれど。「どうしようもないのでしょうか。」

医者は一歩こちらに踏み出して、テレビの画面が放つぼんやりとした明かりの中に立つ。彼はゆっくりと眼鏡をはずすと折りたたんで白衣の胸ポケットに入れる。

「彼女がいってしまうのをただ見ているのはどんなことがあっても嫌だというのなら。彼女なしでは生きていけないとはっきり思うのなら。ひとつ、方法がある。」

ポールは、軟^{やわ}な心臓に恐怖が襲い掛かるのを感じる。「彼女がいってしまうのを見るなんてできません」と彼は言う。「できない。」

医者はずなずく。彼は、ポールのことを今ひとつたび見つめる。この年下の男の顔の上に何か目に見えない線、何か目に見えないしるしを見極めようとするかのように。

「そうだね、わかった、では、これを」と彼は囁くように言う。そしてとてもゆっくりと、手の平を上にして、その褐色の手を持ち上げる。その手の平には何か白いものが載っている。ポールは見つめるが、その目は涙でどんよりと曇ってしまっている。メモ用紙か？ パンフレット？ ポールは目をばちばちさせてよく見ようと前に進み出る。そこにあるのはすり切れたような紙のチケット、何かのパウチャーだ。こすれて消えかかった文字と数字が見える。おそらく航空会社の名前、出発時間なのか。でも何もはっきりとは判別できない。

「それ、なんですか？」とポールは尋ねる。胸がドキドキする。

「もしも彼女と一緒にいきたいのなら、方法がある」と医者は言う。「見てください。」彼は不規則に動くエリザベスの胸を指差しながら囁く。「ここを見て。」医者はそっと青い毛布を横にめくると指差す。ポールはガールフレンドの胸のあたりにかがみこんで目を凝らす。胸骨のすぐ下、入院着の白く薄い布

地の下にかすかだが、光が見える。たくさんのとても小さな光が一斉に点滅を繰り返している。ポールは息をのむ。心配でおののいてはいるが、同時にあっけにとられている。その時医者が片手をポールの肩の上に置いてはっきりとした声で言う。「超高層ビルです。彼女の心臓の周りを取り囲んでいるんです。もう長くはないでしょう。」

ポールは、涙が頬を伝うのを感じる。自分でも気がつかぬうちにまた泣き出してたのだ。

医者はポールの肩を元気づけるようにぐっと握ると、言う。「あと2、3時間でこの小さな町に最初の空港が建つでしょう。それからまたひとつ。それから3つ目が。君が飛行機に乗って、そこ、この小さな町に行きつのが方法だ。でも急がなくて。ぐずぐずしたり、ためらったりしていると、着陸する前に彼女はってしまうよ。チケットは君のものだ。もうその手に渡しましたからね。」

ポールは手の平の上の券に視線を落とし、それから医者の観念したような顔を見上げる。

「でももしも彼女が目を覚ましたら？ 目を覚まして僕がどこにいるのかと尋ねたら？」

「なにもかも彼女に話しますよ。」

「もしも飛行機に乗ったら何が起こるんでしょう。どうなるんでしょう。」

「もうそれ以上何も聞いてはいけないよ、君」と医者が釘をさす。「もしもその気があるのなら、ただ行くだけだ。」

ポールはうなずくと、コートを置き放しにして出ようとして、思い出して引き返すと、無我夢中で袖に手を突っ込みながら猛スピードで部屋を出て廊下を走っていく。一番近い空港はどこだ。と考える。どうやったら最短で行ける？ 彼は小型自動車に乗り込むと、バックして縁石に乗り上げ、周りをよく見ずに、タイヤをスリップさせながら車の流れの中に入っていく。

しかし当然のことながら、車の流れは簡単に彼を通してくれない。どの車線も車でいっぱい、雪のために運転がとても難しい。ポールはハンドルを切って一台のステーション・ワゴンを追い越そうとするが、中に乗っている子供た

ちが手を叩きながら歌っているのを目にすると、ぐっと我慢して、信号が青になるのを待つ。これじゃだめだ。幹線道路，幹線道路の出口，大通りもぎっしりと車で埋まっている。長々と続くテールライトの光の列は、白くかすむように降りしきる雪の中でまったく動かない。

やがてポールは、時間を大いにロスしてしまっていることに気づく。とても間に合いそうもない。空港まではまだかなりの距離があるし、病院からもまだそんなに離れていない。彼は対向車線を走り出し、こちらに向かってくる車をかかわしていく。くたびれたチケットをポケットから取り出して眺めてみる。小さくなっている？ 消えかかっているんじゃないか？ 今となってはポールには何も確信できない。

ついに彼は立ち往生しているタクシーをかかわして、空港に続く道へと入っていく。それから到着者用のレーンにエンジンをかけたままの車を止めて外に出ると、走り出す。一度だけ立ち止まって肩越しに見ると、自分の車のヘッドライトがまだ赤々となっている。チケットカウンターを過ぎて、セキュリティチェックを過ぎて、長い行列をどうにか抜けると、ゲートの並ぶ、青いカーペットが敷かれた廊下を駆け抜ける。チケットに書かれた8Aの番号を探し出そうとする。並ぶゲートの番号は彼がその前を通り過ぎていくたびに掻き消えていく。もちろんのことだがゲート8Aでは、ほかに待っている搭乗客は誰もいない。青いユニフォームを着た若くてかわいい女性がいたので、ポールはそこまで駆けていくと、息を切らせながらチケットを差し出す。彼女は微笑むと何かをタイプで打ち込む。それからチケットをポールに戻すと言う。「ぎりぎり間に合いましたね、お客様。もう搭乗を開始しております。」

ポールはうなずくと、開いている入口に目をやる。ゲートの先を目で追うと、巨大な白いジェット旅客機が見える。そしてそれ、その飛行機を見て、彼はその場で立ち止まる。こんなバカなことってあるわけない。どうやってうまくいくっていうんだ。こんなことがどうやってうまくいくわけがあるんだ。飛行機に乗ったら何が起こるんだ。俺はどうなるんだ。ポールは振り返って若い女性を見る。彼女は眉をしかめて早く行くように急き立てている。

「お客様、もう離陸準備が整っております。ご搭乗なさるおつもりなら、す

ぐにお乗りください。」

ポールはじっと彼女を見つめたままだ。今見ているのは何だ。わからない。見えるのは若い女性ではない。何か他のもの、何か人間の形をしたものだ。でも今や気が動転して彼には誰も見えない。見えるのはただ、エリザベス、彼女の両手、彼女の顔の形だ。ただもう彼女と一緒にいたいばかりに、彼女を抱きしめて、笑うときのその口を見たいばかりに、ここ以外のどこかにいたいばかりに、彼は踵を返す。まだ車はそこにいてエンジンはかかったままだ。振り返ると、空港は消え始めている。ターミナルに沿ってともる明かりも、滑走路に沿ってともる明かりも、皆消え失せて闇と化している。ポールは急いで車に乗り込み、発車させ道に出ると、ありがたいことに今度は順調に進むことができる。急いで病院に戻ると、駐車場の本来止めてはいけない場所に車を止めて、係のことは無視してその場を後にする。エレベーターに乗ってエリザベスの病室階に着くころには、彼女は目を覚ましていて、身を起こして微笑んでいる。彼女はストローからオレンジジュースを飲みながら、転がるようにポールが入ってくるとウィンクする。

「逃げ出しちゃったかと思った。」彼女はそう言って微笑む。ポールは一瞬彼女が病気であることを忘れてしまう。その微笑みはあまりに暖かく、こちらをほっとさせる。

「ごめんね」と彼は言う。「俺……できなかった。」

「わかってる。ラークスマン先生が教えてくれたよ。」

「だめだった。乗り損ねた。飛行機に乗り損ねた。」

「わかってるって」と彼女は言う。「構わないから。心配しないで。それでいいのよ。」彼女はジュースの入ったプラスチックのコップを置く。その微笑みが顔いっぱい広がって、彼に向かって瞬きして見せる。

「よくないよ。よくないんだよ。」

「ポール、いいんだってば。うまく行くから。そのうちにわかるから。」

「だめだよ」と彼は言う。「うまくなんか行かない。」

今にも口づけするかのように彼女は彼のことを見つめる。本当に口づけはしないのだけれど。その代わりに、彼の手を取ってそれを自分の胸、心臓のすぐ

上に当てる。ポールは何か固いもの、何かとんがったもの、手の平を下から突っついてくる先端を感じて一瞬ぞっとする。彼はいぶかしげに視線を上げて、目を丸くする。彼女はまた微笑み返す。「摩天楼よ。」誇らしげともいえそうな様子だ。「高いでしょう。エンパイアステートビルぐらいの高さに違いはないわ。」

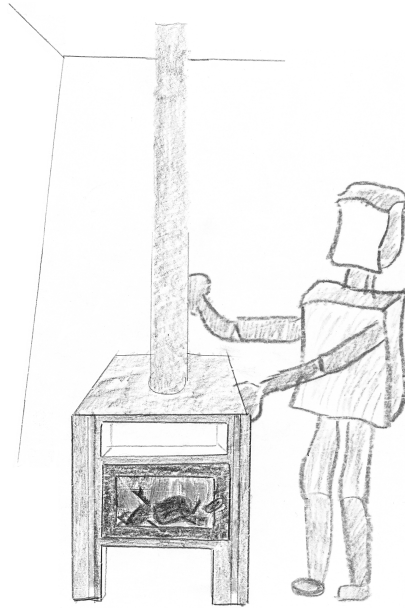
ポールはそこから手を動かそうとはしない。そこに手を置いたまま、彼女をじっと見つめてうなづく。

彼女は目を閉じると微笑んで言う。「大丈夫よ、ポール。見ててごらん。信じて頂戴。大丈夫だから。」彼がうなづくとき、彼女は胸の上に置かれた彼の手を握り締めて静かに歌い始める。前に歌っていたのと同じ歌、デューク・エリントンのあの歌だ。「心から歌を解き放とう。」彼女は囁くように歌い、頭を彼の肩の上に載せる。一緒に窓の外を眺めながら、二人はまた雪が降り始めるのを見ている。ポールはエリザベスの目を見つめると、突然、一緒に静かに歌い始める。

[解 説]

今回は、ジョー・ミノの短編集、*Demons in the Spring* (2008) から、4つの物語を選んだ。タイトルに『「二人」の物語』とつけたが、物語は主に二人の人間関係を中心に進んでいく。

1作目の「リングは君を笑わせることができる (An Apple Could Make You Laugh)」は、その英語のタイトルが示すように、「リングは君を笑わせることができるのに、僕にはできない」という悲しい事実をその裏で語っている。同じ職場で働く二人は、想像上の恋愛を楽しんでいるものの、そこから先には進んでいかない。だからこそ、語り手の妄想は肥大化する。この恋愛ゲームは、電話の伝言メモに書かれた絵、紙飛行機、ファックス、電話、ペンなどを介して繰り上げられるが、それらの小道具を超えて深入りすることはない。遊びは遊びのまま。せいぜいランチの席で彼女が自分の皿のものに手を伸ばすことぐらいしか、二人の境界線は崩されることはない。ミノは、この物語のコメント



で以下のように述べている。

I wrote this one as a response to Donald Barthelme's significantly superior story, 'You Are as Brave as Vincent Van Gogh,' which has the same sense of direct address. I guess what was most interesting to me about the story was the shape it took; a number of small, freestanding sections, which seems to be a lot closer to poetry.¹⁾

ドナルド・バーセルミ（1931 - 1989）の短編、「君はヴァインセント・ヴァン・ゴッホのように勇敢」（1974年）へのオマージュとしてこの短編は書かれたようだが、バーセルミの作品が分断された情景をつなぎ合わせていくように、この作品でも断片的に語られていく恋愛ゲームはその一つひとつが詩のように美しい。

しかしながらこの軽妙な恋愛遊戯の中で、語り手は、最終的にその詩的なうわべをはぎ取って自分の欲望へと降りていくことはできない。また欲望を実行

に移すことは、これまで築き上げてきた虚構の世界をことごとく崩すことも知っている。彼女にキスをするのは、氷の男が熱く燃えたストーブにキスをするごとく、自滅を意味しているのだ。そして、語り手はどこかでこの虚構の世界の崩壊と自滅を望んでいる。

語り手は性的な欲望を満たすことができないのみではない。彼女の心の中にある暗い虚無感の中に入っていくこともできないし、同時にそれは自分自身の感じている深い虚無感を満たすことができない事実とも重なっている。結局、氷の男は彼女の中で燃え盛るストーブの炎に達することはできないのである。とはいえ二人は、相手が自分の虚無感を満たしてくれるとは期待もしていない。世界の崩壊と自滅は、この虚無感を埋め合わせる唯一の救済である。このテーマはミノのお気に入りとして、他の作品にも登場する。

しかし、崩壊と自滅の可能性に終止符を打つのは、小さな二つのリングである。互いの心からの笑顔を見た瞬間に、無垢なリングは禁断の木の実となってしまう。腹蔵のない笑いは、かえって互いの心の中に巣食う深い暗闇をあぶりだすと同時に、そのイノセンスを壊すことを不可能とするからこそ、欲望の進む道を断ってしまうのである。世界は崩壊しない。そして自滅の可能性も奪われてしまった今、さらに増幅される救いのなさは、かえって憎しみを生み出す。こうして、二人の関係は、非常に現実的な終わりを静かに迎えることになる。

2作目の「ストックホルム 1973」は、1973年8月にストックホルムで起こった実際の銀行強盗事件に基づいた短編である。人質と犯人の間に生まれる奇妙な共感とは、のちに「ストックホルム症候群」という言葉を生むことになり、さまざまなフィクションの格好のテーマを提供することになった。2018年にはこの事件に基づいた映画、「ストックホルム」(ロバート・バドロー監督)も制作されている。極限の状況だからこそ起こる人間の絆を、ミノは心理小説の手法で描くのではない。あくまで淡々と起こっていること、交わされる会話を列記するだけで、ユーモア小説を作り上げてしまう。事実に基づいた短編とはいえ、その細部は、最後のクリスティンとオロフソンの友情も含めてフィクションである。ミノはコメントの中で、現実の事件という枠組みを借りてきて、未

知なる部分をフィクションで埋めていくという手法を明かしている。

この短編の面白さは、そのフィクションの部分に見られる繊細な表現でもある。同時にミノは、ストックホルム症候群という心理学的な匂いのする用語への皮肉をも忘れていない。物語は以下のように終わる。

しばしば互いの夢の中に相手が現れると、二人は電話をかけ合って夢の中で見たばかりのことを話し合うことだろう。クリスティンの夢の中ではクラークは氷でできた手となって現れる。クラークの夢の中では、クリスティンは愛らしい白い鳩なのだ。

深層心理学の夢分析を揶揄するようなエンディングだが、同時にそこにはミノの言葉が紡ぎ出す詩的な美しさと美しさだけに終わらない暴力性がある。

3作目の「幻の飛行機」は、二人の若者の話。ここでもまずミノのコメントに耳を傾けてみよう。ミノが光を当てたのは、2000年に入ってから、テレビのリアリティ番組を通して現れた一つの女性像、美人でどこかしら退屈そうで、簡単にベッドを共にしてくれるような女性たちである。

You could see a number of these young women taking on that particular role, and even though there might be a real intelligence or charm there, the role they had chosen for themselves was preventing them from being anything other than a dull sexual item. There is something incredibly attractive and tragic about that person and I wanted to explore that.

寄ってくる男たちは結局、彼女の内面を理解しないまま離れていく。この短編小説に出てくるニコールもそのような女性の一人である。ミノが描くのは、巷で作り上げられた女性像を、自ら演じ続けることで、真の自分を見失っていく悲劇である。

自分自身を理解できないまま、そんな自画像から「幻の飛行機」に乗って脱出しようと試みながら、ニコールは失敗し続ける。ビリーが買い求めたロケット花火はそんな幻の飛行機の象徴でもある。点火しても結局離陸できない花火たちに黙々と火を点けながら、ビリーはニコールに対しての自分の不当な仕打

ちに思いを巡らせる。そして、再び彼女と仲直りしようとするのだ。モーテルのバルコニーに現れたニコールを、ビリーは新たな目で見つめることになる。しかもニコールの登場をかたず飲んで待っているのは彼のみではない。ベリーズの街角の子供たちも小犬でさえも観客である。おそらくアメリカのリアリティ番組などに毒されていない子供たちは、まっさらな目で、ビリーとニコールという二人の人間のリアリティの観察者となるのだ。

やがてニコールは扉を開けてバルコニーに出てきた。彼女の髪はまだ白いタオルに包まれていた。そして胴体には白いシーツをぐるっと巻き付けている。彼女は本当に愛らしかった。まるでお姫様のような。小汚いモーテルのシーツにくるまれていても、彼女には何かしら知的で洗練されたところがある。それはその首の長さや身のこなしからわかるのだった。本当は賢い少女なのだ。それなのに、おろかな、あまりにおろかな行動をとることに慣れてしまっているのだった。彼女は今、わざとつまらなそうなふりをして、タバコを吸っている。手すりに寄り掛かったその体のしなやかで華奢なこと。

こうしてビリーが点火した、トルコ帽をかぶって自転車に乗った紙のお猿の花火だけは、自転車をこいで進むこともなく、突然離陸して、見えなくなる。幻の飛行機は確かに離陸した。その瞬間ビリーは本当の恋に落ちる。

最後の「光の空港」も、同じく飛行機がテーマの作品である。ミノの短編に特有の幻想的な物語だが、ここでの読み解きはさらに複雑である。突然エリザベスの体の中に出来上がる都市状の腫瘍はいったい何の象徴なのだろう。一見シンプルなようでいて、ミノはやすやすと回答を与えてくれない。

読者がすぐに思い浮かべるのは環境問題であろう。この物語は地球そのものが生きているという「ガイア説」の譬えとして読み解くことが可能である。gaiaの語源は、ギリシャ語の *γαῖα*、つまりすべての生きとし生けるものの母としての地球を意味する。エリザベスを地球に譬えるのなら、都市化が進み、その結果私たちは、母である地球、この場合はエリザベスその人を殺すことになるのだろう。昨今の深刻な地球温暖化を思わずにはいられない。

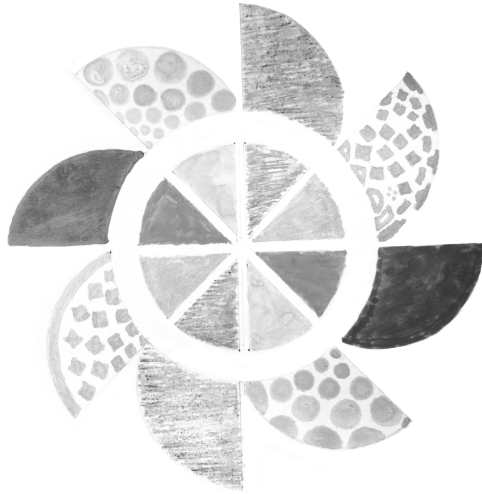
ラークスマン医師にあと2、3時間の命といわれたエリザベスだが、少なく

とも物語の最後で、彼女は死を迎えることはない。それどころか、「大丈夫よ、見てごらん (You'll see)」とビリーに言い続ける。ある意味この言葉は、これから起こることを示唆しているとも取れる。体の中で急速に進んでいく都市化の弊害に気づいた人々は、環境問題を解決しようとするのだろうか。母なる都市と一体化したエリザベスの言葉は、明るい未来を語っているのかもしれない。穏やかなエリザベスの様子からは私たちは彼女の言葉の真意をうかがい知ることができない。「私は大丈夫よ、見てごらん」なのか、「私がいなくなっても大丈夫よ、見てごらん」なのか。

もう一つの解釈は、この物語が擬人化されたニューヨークへのオマージュである、というものである。エリザベスの体の中に育っていく都市がニューヨークであることは明らかである。20世紀の初めから始まって、電気が通り、第一次世界大戦（戦火の中で人々が祈りを捧げている声が聞こえてくる）を経て、エリザベスの体の中のニューヨークは急速に大都市に育ち、工場が立ち並び始める。ラクスマン医師は、この時点でエリザベスの余命はあと2、3時間だと宣告することになる。

絶望するポールにエリザベスを救う方法はないのだろうか。ラクスマン医師が与える方法は、一枚の飛行機のチケット、バウチャーである。おそらく飛行機に乗ってエリザベスの体内にある都市に行きつくことなのだ。ここからは、息をのむような展開となる。果たしてポールは飛行機に乗ることができるのだろうか。ぎりぎりまでポールは搭乗口にたどり着く。しかし、なぜかしら彼は今にも出発しようとする飛行機に乗り込むことはない。物語は一気にアンチクライマックスとなる。この危急の時に及んで、なぜ彼は二の足を踏むのか。この展開に読者はポールの優柔不断に苛立たしい思いをすることだろう。

しかし、ミノのはぐらかすようなスタイルに段々慣れてきた読者は、もう一度気をつけて、今までのページを読み返すことになる。一見エリザベスの救済法を提示するかに見えるラクスマン医師だが、そのセリフは決して救いの提案ではないことに注目してほしい。ラクスマン医師は次のようにポールに尋ねる。



「彼女がってしまうのを見るのは耐えられない、そうですね？ (You do not want to watch her go, do you?)」

ポールは首を縦に振る。ああ、神様、彼は泣き始める。気がつくやと医者目もまた涙で一杯になっている。

「ってしまうのを見るのは耐えられない (You do not want to watch her go), だって彼女をこんなに愛しているから。そうですね。」

ラクスマン医師が尋ねるのは、「彼女を救いたい」かどうかではなく、「彼女が自分を残して行って (逝って) しまうのを見るのは耐えられない」かどうかなのだ。そして、ラクスマンが提案するのは彼女の救済法ではない。「もしも彼女と一緒にいきたいのなら、方法がある (If you want to go with her, you can)」(下線は筆者)。ラクスマンはこのように、彼女と一緒にいく (逝く) 方法を提示して、飛行機のチケットをポールに渡すのである。

ポールが仮に飛行機に乗ったのだとすれば、そのあとに何が待っているのだろうか。魔法で作られたかのような幻の空港の搭乗口で、静かに待つ巨大な白い旅客機を見つめてポールは次のように自問する。「飛行機に乗ったら何が起るんだ。俺はどうなるんだ。」ポールがこの時におぼろげながら理解したのは、まさに自分に課された行動の真実なのだろう。今にも頭で天を突こうとし

ている摩天楼は、ポールの搭乗した飛行機によって爆破されるのだとしたら、そのテロ行為による「自爆」によって、ポールはエリザベスを殺す腫瘍に戦いを挑むことになる。こうしてポールは、エリザベスと共に「逝く」ことができるのだ。この物語は2001年9月11日の物語ととらえることも可能なのである。

しかし、ポールは結局テロの道を取らなかった。土壇場でポールが選んだのは、一緒にいくことではなく、ポールにとって恋人であり、母のような存在のエリザベスの、まさに生きているその身体を自らの手で感じることである。そしてそのポールの直感こそを、ラクスマンもエリザベスも受け入れるのである。一見アンチクライマックスに思えるポールの行動は、「彼女と一緒にいくこと」を選択しなかったゆえの救済なのだ。

この物語の中で流れ続けるデューク・エリントン作曲の“I Let A Song Out of My Heart”は1938年の歌である。ナチス・ドイツ台頭の時代、一気に世界が暗い時代へと突入する時代である。エリザベスの体そのものが、この歴史上の大変な時代に差し掛かっているとしたら、一見失いつつある恋人を歌に譬えるこの歌にも、大きな意味があるのかもしれない。タイトルの中のsongをsoulととらえると、「私の魂を解き放とう (I let a soul out of my heart)」となる。物語最後のエリザベスの優しさと穏やかさは、魂を解き放つ準備のできた人の持つ覚悟とも取れる。それに唱和するポールともども、最後に二人は運命を静かに迎え入れるのだろうか。

最後に作者の本作に寄せるコメントを載せておきたい。

I don't know what to say about this one: an acquaintance of mine was engaged and a few months before the wedding, his fiancée was diagnosed with lymphoma. She went pretty quickly. We went to the memorial services and I don't think I'd ever been so touched, I mean, as an adult, I had never experienced anything like that before. Even in death, you could see how much their love had meant. It got me thinking that, if my wife were ever to get sick, she would end up having to be the one to comfort me.

死にゆく者と残される者の物語としてミノはこの物語を書いたと取れるが、

おそらく本作から読み解けるテーマは、以上に述べたように複数考えられよう。ちなみに、本作の解釈の鍵を握るラクスマン医師の名前、Lahksman はちょっと変わった名前である。Lahk とは、インドの数字単位で 10 万を意味する。まさに「何十万の人」という名前を持つこの医師は、数多くの人々の死と、その死をめぐるさまざまな人々の関係と物語を見届けてきた心優しき死神なのかもしれない。

今回も読解において、たくさんの人々の援助を得た。まずは一緒にこの物語を読んでくださった横浜読書会のメンバー、そして慶應義塾大学法学部設置科目の人文科学特論の履修者の学生の皆さんに感謝したい。異なる世代と共に同じ物語を読むことで、今回も複層的な読解が可能となった。

ミノの *Demons in the Spring* の本の特徴は、それぞれの短編に、個々のイラストレーターがつき、その物語世界を絵で表現してくれていることである。つまりイラストもミノの文学世界の一つの解釈を提示しているのである。コピーライトの問題でこれらのイラストを載せることはできないが、人文科学特論の履修者の S 君が物語の読解からオリジナルのイラストを描いてくれた。原著の精神を踏襲して、この作品解釈の部分で、それらのイラストを使わせていただいた。

この場を使って、皆さんに感謝したい。ありがとうございました。

- 1) 解説の中のジョー・ミノのコメントはすべて、*Demons in the Spring* の出版社、Akashic Books のホームページからの引用である。アドレスは以下の通り。<http://www.akashicbooks.com/extra/demons-in-the-spring-literary-blog-review-project/> (閲覧日：2019 年 12 月 21 日)